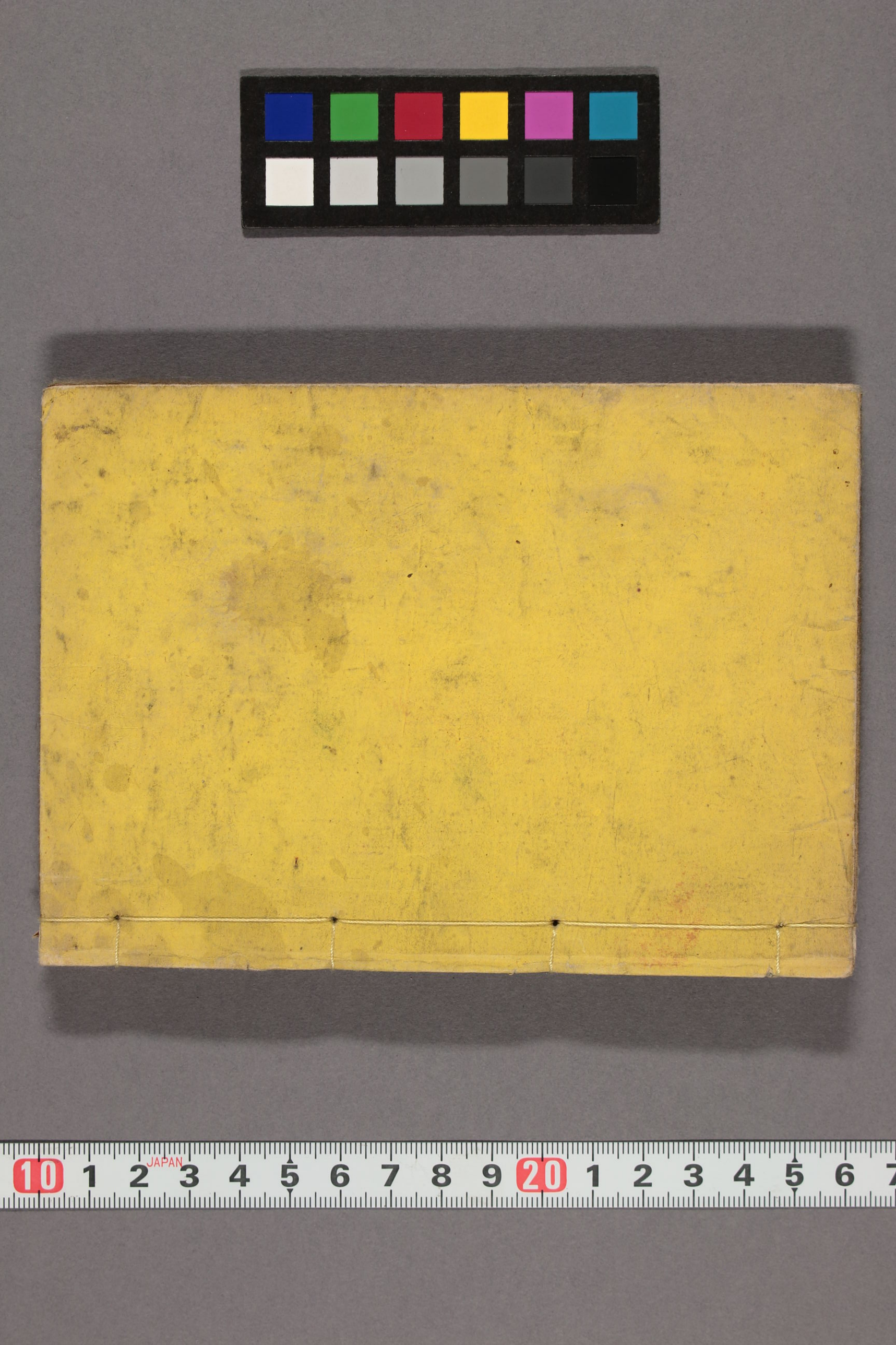


一具庵大仏撰

俳諧故人續五百題

江戸書林　萬笈堂
桂林堂

人心不同猶如其面作俳
句者亦復自甫犹我所好
以譏彼彼亦犹其所好以
笑我至他讐相視者非惑
之甚乎予晩年慕蓮翁遊
于松窓之門雖未能入其

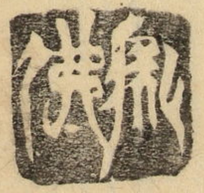
室、螢雪工夫殆費十數年、
暇日涉獵諸抄据摭以為
一冊子、聊以付尚友之義、
近日書肆某乞梓以行世、
予謂拙集一時隨聞見而
録之、聊無示人之意、取捨
武未盡其公也、雖然寒鄉
僻地、晩生乏資者置之於
八上則、江山風月自在其
中、亦不為無助矣、松窓嘗
曰、古人所好、一二異其躰
裁、苟能蒐羅則可為大家

也然則此冊雖小、安知非
其、楷様哉

文政己丑春正月

一具庵一具

九世　十方空二書



玉百様のしらべなるうあるうるあれと
ちるるふるいもとして大廈高楊を
方寸うたいいるものすなわち短
句もてあるふるもるるもるるなり
けりいふもかしこうけれと昇平鼓腹
の御代のるるるるるるなる
中るも帳壹の花の夕漁村の雪

みあけほの盞をめくらし舟ならねと
かきてゝこゝろえぬ人かんなりける
ちかいはかれしと風雅の二字に眼とゝめて
こゝろみ身あまらうにこゝろきゝいて
むとおもひかまふるはまかれしかなり
一具菴主このちとのひくゝぬるふ
とろふるをいなけきてきやきころ

そやしに落て園の實捨て句
壽褒にひめおきゝゝろをぬこゝあまゝ
此家事にちからをもちふるのあ
まりあふりちるに色えて櫻本まて
さゝちとゝはなれしまあはれこのさら
しかまてためにいてゝるもめまし
なれと俳諧のこゝちにいをいれて

画棟虹梁ゆゆしくも
き準縄ぶらんもいとうとな
文政己丑もちつき
ふらふらふらふら日

大雲栗菴

古人續五百題發句集

春之部 目録

花　初丁
もち搗　四
搗　二
ふる川搗　三
八手搗　四
歳旦
元日　四
ふる日　四
初かすみ　五
新玉　五
著衣初　五
ふる川霞　五
こよみ　五
玄ふる　五
ふる郷の春　六
花はる夷　六
代の春　六
福寿草　六
浮慶　七
門松　七
うゝ志ろ　七
ゆゞりゑ　七
大ふく　七
歯がため　七
書初　七
屠蘇　八
雑煮　八
太箸　八
万歳　八
蓬莱　八

かしわ餅 八
水いもゝ 九
若水 八
年玉 九
ゆりくゝど 九

植物之部

子の日 九
玄扶艸 十
柳 十二
椿 十四
藤の塔 十五
ゆんゝ 十六
芦角 十六
菜の華 十七
連翹 十八
小松引 九
七種 九
若草 十
芹 十一
ゝゝろ 十二
子繍 十四
蓬ゝもち 十五
はゝゝじ 十六
接木 十六
うど 十七
種おろし 十七
梨の花 十八
なゝかゝ 十
梅 十一
若草 十二
ろろ緑 十四
すゝれ 十五
木瓜 十六
茶摘み 十七
海棠 十八
杏 十九

木蓮花 十九
苺 二十
草むぎ 十九
山吹 二十
苗代 十九
はゝじ 二十一
ゝゝろ 二十

生類の部

鶯 二十
福との巣 二十二
白魚 二十三
ゝゝの巣 二十三
雀子 二十三
百千鳥 二十三
雉子 二十四
ゝゝゝ 二十四
帰雁 九九
乙鳥 九九
駒鳥 九六
ゝゝ 九六
麦鶉 九六
蝶 九六
蟻 九七
蜂 九七
蜆 九七
田螺 九八
蛙 九八
蜑 九八
若鮎 九八
飯鮒 九八
落角 九八

時候之部

佐保姫 九九
ゝゝき 九九
きゝゝ 九九
左義長 九九
おゝゝ月 二十
霞 九九
泥生 九九
風巾 二十一

数入 三十一　餘寒 三十一　河かぜ 三十一　焼野 三十一
暦間 三十二　残雪 三十二　東風 三十二　春風 三十二
雪解 三十二　春雨 三十二　春の日 三十二　春の月 三十二
春の夜 三十三　春の海 三十四　春の月 三十四　春の海 三十四
春の野 三十四　春の雨 三十四　水ぬるむ 三十四　海雲 三十四
海苔 三十五　寒食 三十五　草餅 三十五　陽炎 三十五
糸ゆふ 三十六　二日灸 三十六　初午 三十六　彼岸 三十六
伊勢 三十六　涅槃 三十七　西行忌 三十七　永き日 三十七
出代 三十七　雛 三十八　鶏合 三十八　汐干 三十八
馬刀 三十九　曲水 三十九　畑うち 三十九　長閑 三十九
いかれ霜 三十九　案入 三十九　行春 四十

通計百五十二題

古人續五百題 發句集 夏之部 目録

生類の部

ほとゝぎす 初丁　閑古鳥 三　老鶯 三　鶯の巣入 三
ゑ雀 三　翡翠 三　羽ぬけ鶏 三　鶴 四
水鶏 四　鳰 四　水鳥の巣 四　ゐもり 五
かはせみ 五　羽蟻 五　あまがへる 六　蛙 六
ぶゆ 六　蜑 六　夏の虫 六　夏の虫 六
蚊 七　蚊ヤ 七　蚊 七　蝸牛 七
蟬 八　空蟬 八　蝿 八　蝿の子 八

時候之部

更衣 八
はつなつ 十
夏菰 十一
新茶 十一
麥秋 十二
蝸 十三
卯地うち 十四
入梅 十五
夏の月 十六
簗うち 十七
青田 十八
帷帷 十九
あつさ 九
卯月 十
夏書 十一
茶摘 十一
小角豆 十二
つばり 十三
競馬 十四
虎ヶ雨 十五
夏野 十六
田植 十七
田草刈 十八
帷子 十九
青簾 九
葉月 十
滝佛 十一
風呂 十一
かゝり火 十三
粽 十四
竹醉日 十四
夏の日 十六
夏山 十六
早乙女 十七
あつぎ 十八
抵園香 十九
蒸暑 九
夏の月 十
蓮清堂 十一
吹ぬき夜 十一
鄭 十三
菖蒲湯 十四
五月雨 十五
夏の日 十六
火串 十六
早苗 十七
うちわ 十八
氷室 十九
雲の嶺 十九
蛍 九
登簾 十
蚊帳 十一
あつさ 二十
夕立 九一
簟 九一
牛蛙人 九二
さゞみ 九二
風鈴 九三
ところてん 九四
笠卒塔 九四
沖鱠 九四
さゞび井 九九
行ぬぐ 九九
袁瘦 九九
秋近し 九五
不二詣 九五
清水 九三
川狩 九五

植物の部

卯の花 廿六
若楓 廿七
実はちす 廿七
夏木立 廿七
下闇 廿八
青嵐 廿八
唐盤木蓋葉 廿八
桐の花 廿八
若葉 廿八
夏柳 廿八
まゝ柳 廿九
樗 廿九
栗の花 廿九
合歓の花 廿九
雲仙つの花 廿九
花のそら柳 廿九

百日紅 三十
葵 三十一
牛の子 三十二
紅花花 三十三
たらちめの 三十三
紫陽花 三十四
萍 三十六
蓮葉 三十七
若牛 三十七
蔡子花 三十
苔のそ和 三十一
蚊帳 三十二
夏菜 三十三
蛍草 三十四
何骨 三十六
おりぐろ 三十七
林檎 三十七
ぼたん 三十
けし 三十一
茄子 三十二
撫子 三十三
藻の花 三十四
あやめ 三十五
尊菜 三十六
蘭の花 三十七
芍藥 三十一
荊 三十二
あうぎ 三十六
百合 三十三
檳榔 三十四
夕がほ 三十五
蓮 三十六
芙蓉刈 三十七

都合 百五十二題

花

古人續五百題發句集

春之部

あとふらく生ひたてよ花の雨　貞德
ふれかくとそうそう花の芳野山　貞室
花をまふこの山風やとし法うみ　季吟
武蔵野やけふう出てきそ花の酒　宗因
目うつりや花よりもせそるそ〳〵世山　鬼貫
花ちる山と日こそ為の釣ほうけ　芭蕉
そ和ゑとりあのとそる童うゑ　立圃
花さうりいそ〳〵みやこの酒ゑ　守武

花さうり子てあるうぬ　其角
たゝかへよも毛虫よなくゝ家樵　嵐雪
ちるくゝあはしくゝと花えか宗　去来
うゝくと寒てへ花えの留ち居哉　丈草
花さいて死ともうるいう病ひう那　来山
ちゝはこ一枝ぬるや葛城とろまくら　正式
御茶るや西行庵りちゝはようせ　言水
首出して岡の花えよあらひとそ　荷兮
ふまてあそふ日ゝてそ那えこの菊　野坡
花ふりれて夢よう寒ふ死んうる　越人
大佛うゝろふ花のけうこの宗　路通
樒の袈裟ゆそうり寒そや花の中　北枝

昆布出しや花よ氣のけゝうり城　利牛
酒新やふ琴の音せよ窓の花　惟然
大峯やしゝ世の奥は花のそそ　曾良
山やそ根須根くゝの酒そやし　亀洞
めつしや内ゝ花見の初めゝ　杉風
朝えゝの湯に行腰ゝ庭の花　孤屋
ちりのひや初花うりの物ちそれ　野水
見ものいろはあけうり花の村　嵐弾
数ゝそそ泊ねそ人よゝ　舟泉
疱瘡のあとまるゝゆるそなえ式　傘下
藥喰ふ白ひやくゝ花ゝ　仏戈
常秋ふちつきて花の鳥　千那

櫻

あくけるや風車寄る花のとき　薄芝
そるの山ぞとうふまへて安よまん　晨風

鶯の巣ふ嵐の外はさくらかな　芭蕉
糸をあとゝゝ搖さゝ生とつゝひ丸　甚角
搖ねまそうゝくとるひとう式　秋風
を敷うゝくれやらん縁ん山はそら　如泉
かけあゝく降出きれけゞ搖かゞ　支考
蘿寺かくまねりのゝさゝ兵この南　李風
殺を竹川妾搖うる陽茶亟　嵐雪

足あとをさくらゝ一枝ハたゝゝゝもゝゝゝ菴二ッ　杜國
おちつきハ奥やまゝゝゝ山ばゝゝ　尚白
雞の声もきゝゝゝゝゝゝゝゝ搖このゞ　利牛
屋形ゝゝ上野の搖ちりはけゞ　凡兆
書の端北前ゝゝゝ入るゝゝ山搖　杉風
食の附ゝれあゝまるゝゝゝ作ゝゝ　丈草
搖ゝゝゝ紛ゝゝゝゝゝ乞食ゝゝ　浮壺
ゝゝきゝゝ百川のゝ体搖この那　梅舌
蒟蒻の各物ゝゝん山をゝゝ　荷兮
筆ゝゝて墨染搖かゝはゝゝ　李里
泥ゝゝもせゝ菜ゝゝ蜷ゝゝ　德元
重頼

初櫻

桑新芽より芳野もさてゆ江戸櫻　素堂
浮世座のとことわつらるり伊勢櫻　宗因

温石のあつほく夜ゆやうはらら　露沾
七夕ゆ契おきそしそれ　鬼貫
小猪まつり上野谷中の初櫻　素堂
都ゆ仏ねはつるゆ出ゆ初さくら　芭蕉
ちり櫻文殊のうるさ命とせん　乎角
借ふれもとりふらそよ是それ櫻　去来
人の氣もかく窺ハし初さくら　沾徳
糸屋や木ふりを重ねとれ櫻　沾荷
頬白の終ふるかくよ初先久良　園指

八重櫻

奈良七重七堂伽藍八重櫻　芭蕉
花恒や雲も和光の八重さくら　鬼貫
ふてこはいく〳〵はきくん八重櫻　吉保
八重櫻京ゆも移る奈良菜れ　沾圓
つゝして是七重の襟を八重櫻　幸[illegible]

遅櫻

万日の人はちりそや遅きくら　甚角
さく花やこゝのゆ下まなほ遅櫻　鬼貫
誰毋そ花に濃数くるおそさ久良　紅甫
紙屑やとろくゝ小あそ代くら　紫雪
はうねまをまろやくひろ日の遅櫻　常久

元日

元日やおのゝ人ゝ　秋のくれ　芭蕉
元日や月うぬ人のはしの音　其角
元日や粥くらこくしのゝ宮　尚雪
元日や土佐ゝうゝは（胴）都もせと　去来
元日も旅人をえる驛うゝ　伯德
元日を明きぬしたる霞の形　一笑
元日の木ぬ間の鬚馬吳ゆるし　重之
元日や夜ふうきゝ衣のうゝ表　千川
元日やまゝ尼ゆうは梅のくゝ形　猿雖
梅ゝ香の筋ふ立する初日うれ　支考
亀の脊ふ海老はのあゝ初日山　鬼貫

元日

濡いうゝ中大うゝけの初日かけ　任行
朝紅や小うゝくしゝ初かゝみ　鬼貫
枇杷の実ふけゝたしうゝ初霞　斜嶺
いゝゝ玉の馬もあゝ初ゝむあゝ　嵐雪
鳥の実西あゝ玉の年ゝもうゝ　鬼貫
あゝゝあまゝあゝてまゝうゝ春日式　貞室

新玉

寒ふあゝ七ゝゝしの綿やきゝ姫　宗因

着衣始

母うゝこの紋ゝゝじや長衣ゝしめ　山峯
移ゝゝくゝいゝ墨の袖きゝけゝ　しゝく

初夢

けり美や額ふあの法扇子よと　其角

少え明て浪のうつ舟や泊瀬寺　嵐雪

初ゆめや濱名の橋れ今のさま　越人

さん夢のよきこゑやこゝ七日　隈光

こよみ

下りの吉ふみ一生のこよみうる　徳元

伊勢暦みちれおくまてそうふれうり　幽山

春立

くるとしの今年ふくを茶五弁　芭蕉

春立や星の中うら松の色　鬼貫

年と春とさん天の戸やゝあ夜　正式

今朝の春

年ハたゝ忍かゝみのとゝ那のくら　存武

我名る式の宮ゆくるやけさ社春　貞室

今朝の春奥孫も有産も有撰を為　嵐雪

刀さん供もつゝしけさのくゝ　正秀

伊勢浦やお木引体む今朝の春　亀仙

けさの春海ハほとあり春のうら　西鶴

紬さりて松の緑繋るゝ彩れくる　梅吉

々ちの春寂しからさる閑この那　冬松

佛より神そたゝくきけさの春　と才

春の夜

二日ゆもねくらハせしなゝの春　芭蕉

稼る年や日もらとんけの春　春吟

おりゝやけの初折の発句　宗因
まゝ茶の多いとゝうてをのゝ花　惟然
ゑれ人のまかゝもかゝしをれまゝ　古梵
五十ゆて四谷をゝうり花のくゝる　嵐雪
窮所てゝ達しいかてもをれまゝ　去来
背ゝらおふりのをゝせゝや花のちる　野坡

昌陸の松ゝゝ侍きね御代のまゝ　利牛
治まる氣やアんとゝうのゝよの春　正武

福寿仏一すのゝはゝえなり　言水
らく寿草やハ明ゝゝの梅は花　富月

侍代の春

福寿仏

侍慶

新集の御芝ハふゝれ言ゝきおゝこ　宗因
長松ハ新の名ゝて寿ゝる侍ゝゝゝハ　野坡

門松

門雲やゝゝ海ゝゝゝゝゝ武庫の山　鬼貫
ゝゝゝ門の松ゝゝゝゝゝ　宗已
門まゝもかゝゆるきゝ見ゝゝゝ　正式
まゝゝゝ門やゝゝゝゝゝゝゝ門の雪　徳元
門ハ松ゝ薬園の雪寒し　舟泉

ゝゝ会

山柴ふゝゝ白ゝゝ竜ゝゝ　重五
ゝゝ白ゝゝゝゝゝゝ神の馬ゝ　胡及

楪	ゆたりきあや次まふ小家の大かさり 楪の世阿弥まろり乎青かたら	立圃 嵐生
大福	大ゆゆ〜や淡路もみさん菜白山 大ふくやけふそそもる江戸菜哉	鬼貫 止安
歯固	ちかそそやとんぶさして水の恩 歯固や鹿茸の神はめ〜んと	言水 直良
書初	書初や行年七十拾州の位 ゆそりそや日ふ数〜そまじめ さそもまろや震の立をかさ	宗因 其角 貞室
屠蘇	そその酒へめ〜ぶ玉泉の小亀うな 屠蘇酒や武義形も君ろ万寿盃	李吟 正陽
雑煮	さふふ煮や手代の数々ぶかりを 庭竈牛もさふをそわりきア	そて 其角
太箸	太箸や和泉の松木えいさ〜は ゆそそ〜や太鼓の役はおそ〜発	唯安 秋坊
萬	まんさいやめ富士の山麓めけの去 清れてきて子ゆまろせろり万才樂 万寿の今ろそ陳ふ明〜きア	青雲 一井 荷兮

蓬葉

蓬葉の松ふるやゆゑ恨の袁　其角
蓬葉よりかけくかさるや老れ袖　衣来
蓬葉や山城密林ふかうし　維舟
蓬葉や船の近れかくるゝと　湍水

鏡餅

古寺の日ふとせそうほ鏡餅　宗因
むくやよね一所料の餅のち　負室

若水

若水や九ふ年の法ゆゑ　風鈴
ゆゑ水やまふくゝき爲氷　武仙
いつゝそらちゝ雪の振　亀洞
ゆゝんゝ鶴の水ゝは涼ゝきよ　其角

重玉

年玉をとれゝゝまてもえ方の新
ゝしゝゝまゝ古風をあゝく扇ゝな　可笑
羽子板の絵柏栄新やゆとの春　徳窓

遣羽子

ゝ絵はゝゝ羽子いゝけゝ子供ゝ新　季政
ゝこ板の笛ゝうゝきゝう美れ雪　満水
生死れむゝし男ゝと水ゝゝひ　吾仲

系統

ゝんゝ子の森やゝゝ絵ゝ系統ひ　其角
松脂ハたゝ膏薬の子れ日ゝ角　丁我

子れ日

腰ゝれゝ子の日れ歌やいゝゝ雲　負徳
ゝゝれて踏ゝほとゝゝ元子の日式　李吟
負室

小松引

摺ひくやあ孫このりてる姫小芝　宗因
加賀ふ小松引ゆ越中ふ浜ふ芝清　幽山
引つまて松をくろ西ふ嵐このな　其角

七種

七種をこるんうさる首う那　嵐雪
七くさや跡ふうかう朝かふさ　其角
七種をたくきたりて注子哉　俊似
七草や粉ひきうけく切きさみ　野坡
七くさふ枯草ふ乗る草鞋哉　治徳
七種ぬやーそ七ひまうー　貞室

蕪

四方よりの蕪ふもちろうふ後ふ　芭蕉
六日八日中ふ七日のなかるこの朝　鬼貫
うかれきて菊ふ日や神乗市　舟竹
一年の仏拍子ふなかるこの朝　無論
風流ふて石ふ土ふ蕪ふ系　嵐雪
蕪ふ船扇ふうをこふ胡蝶　其角
草枕なかるうの人附といん　山川
まふ板ふ宮ーー蕪の青ちく　此助

芸の草

誰ゥ家の鶯油ふやふ芸の草　鬼貫
山ちうてんくふ芸の　ふさ　來山

若菜

隣はらしら〳〵れめいらる若菜哉　貞室
夫の郎ふはくらふてゐるる菜摘　鬼貫
そそくと雪付てらよいる形奏る　素山
袖若菜まりとの宿のとる汁　芭蕉
るる菜摘あるる木を割畠うな　越人
うかれ雀妻よ〳〵里の鉢いる菜　其角
一かふの牡丹ハ寒き若菜う形　尾頭
ふ市や寒ふ漕ふはいるる舟　嵐蘭
霜を若ふ雪ハ楽をる若菜哉　嵐雪
猪出して摘ふもこえぬ若菜の郎　野水
吾ふふも残してわうぬるる菜うれ　素秋
蒔寒ふ若を出ふはる若なの角　素行

芹

如出て摘ふ芹跡のるるなこの郎　小春

我ふあう鶴そこのそこせりの食　芭蕉
沸ふ鑿芹流はなうま此の茶　其角
摘ふりも元ふ寒ひまる根芹哉　亀翁
芹摘ふてこけて酒なれ芹ふこれ　且藁
初鰹や寒田の小芹うと　定村
芹はもや侍寒行一そこてれ　野径
名地けり芹の白根のかみあふ　幽山
地の底ハ雪川出を根芹の角　貞室

梅

手鼻うむ音さへ人梅のさかりこの京
高瀬や海よりくれてうめのさかり　芭蕉
江戸根の梅ひらきさかり烟出し　去来
梅ゝ香や乞食の家もそこ面に　丈草
梅干しやこゝろうてゐる梅のこゝな　甚角
さかり形くふ梅ゐそしまる月数ゐる　嵐雪
病後の庭そこく梅のさかりこゝな　野水
梅の花ゐの乳ゐいふねけしき哉　曾良
おりつさゐ遊ふよ梅ハ数ふいちゐ　越人
痩藪や作りゐふれの軒ゐ梅　惟然
こゐるくふ咲そこゐ梅の花　千那
日あたりの梅さくこゐ後や屠牛屋　野坡
　　支幽

花白ゐ梅そ云双のことゐ京　宗祇
あいてこゐゐの人の香ゐ梅の花　貞室
北面の月行ひゐ人まとのむ光　季吟
星とゐ蛍ゐ人ゐゐと梅のこゐな　宗因
梅一木ゐ見ゐくく草のこゐこゐ　露沾
梅を云ゐ花ゐおのれ花ゐもの見　鬼貫
白雲ゐこゐの見きゐゐ梅の巻　竹亭
春ゐ居ゐく折ゐ手ゐかし毒ゐ花　鴎歩
あゐゐゐ北羽年ゐ慶ゐこゐ梅の巻　万子
梅さくきこゐ後の家見ゐ毒ゐ　利牛
毒さくや白の挽ん木のゐきまこのり　曲翠
梅のこゐ形名ゐよりひよくて白ひこの角　来山

柳

芭蕉

それなのふ柳のさらるもるへこの郎
小風ふまーてあるりのやうなきうる
池ふるみとりをいとくゆるたかる角

負笑

ろふの日を柳ゆりて川そこふ
柳ろみのそ孫ゆとゆひろ三日の月
池ふ鶯ふーかふきなるふ柳ろけ

宗匠

鬼貝

季吟

素堂

おりこ生くりのうつかーき柳こうる
傾城の賢ふろへこのかなきう角

戈魯

甚角

嵐雪

同夢ふ枝ゆく柳や柳この寄
青柳のこいてのそふ板戸ろ柳

太素

丈草

越人

引ませてそるーかるる柳この家
ゆとものなーとるりやうきう角

尺ぐろうくやうるうこぬる柳この角
をうれく柳を風ゆとりけうん
よるこ川柱ゆこ流なき柳このれ
朝日二ふかるきのうこく白ひろる
こ緑りをもへふして柱ーかるき八

小春

障子とー月のるひうを柳かる
町ろへ寄ーー宿のやゆたうる

一笑

せきまこの尾ハ足ゆけさる柳武

尚白

やふの雪柳をうりをすうこの郎
ゆく風ふ牛のつきむく柳かる

荷兮

青柳ゆ寄うれや鯉のさみこ流

湖春

寄ーーー指やうき

素龍

春水

利牛

一風

杏雨

探丸

一吹

野花

とこふ 賣声 大系のさとひ ふるの　　其角
夏 毎ふらとや 野巷や市の中　　若法
ムホしくや 今も 丹波の鬼ところ　　真人

下萌

下萌や 屋ゝそゆうのこれ 雪　　二川
下萌の氣ゝをけゝや 真の香　　李由

若草

若草やきのふの箭ゝも 木綿香　　宝角
ひう草ふ ちり 祢ふ草ゝや 羽うゝを　　野波
立ゐふ 若くゝさゝて ゝる 州 五 角　　亀助
ゝゝくゝちるかゝふ あゝ つまや 二正まて　　問津
若草をけふ 春 駒の ゝをけゝ　　良俊

椿

うゝゝ きの 仏 立 おとしゝる 椿 の な　　芭蕉
曉の はゝ ゝへ ふ おゝ ふ はつゝき ゝ 邦　　荷兮
藪ふゝ 蝶 ま の はゝ ね 桂 の 家　　卜枝
鋸ふ かゝゝ きゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 新 つゝき　　嵐雪
ふゝ 王 の 露 ふ き ゝ つゝ はゝ 武 我　　車来
枝ゝ ゝ 伐 ら ね ま ゝ ふ ゝ を 桂 の な　　湖春
ちり 椿 ふ ま ゝ ゝ ゝ ふ 績 て ゝ る　　野坡
取 あ け て ゝ ゝ や 椿 の わ そ の ゝ る　　洞木
穂 ゝ 枯 ゝ ゝ 毒 ふ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 武 我　　残香
口 紅 の ち り 花 ゆ ゝ ゝ ふ は ゝ き　　鬼貫
土 ゝ ふ 羅 ふ ち り 辺 つ ゝ ゝ の 角　　孤屋
花 入 や か の 海 底 の 玉 つ ゝ き　　宗因

紅梅

紅梅ハ濃ふ且一書の染小袖　立圃

梅や紅人のけそひの初かみ　鬼貫

紅梅の散るや仙家の庭の雪　元禄

紅梅や元良武徳る玉そそ且　芭蕉

紅梅やかの浪園寺やふれ垣　泊徳

紅梅や北丘より劣る比丘尼寺　薫村

未の黄

そやされそさくね梢も末の黄弐　露川

末の黄ふふ雀かくれやねゆ多ふり　均水

ふれーふも去年の後藤の末の黄弐　野蝶

きのあまて四すをふるれ寺ふれ　玉鞅

若緑

の名やふふ神の連想のより猩　鬼貫

名ふみふり神のくる松ひ緑ふれと　来山

黒ひとの雲のそふもやあふみふそ　土芳

蕗の塔

駒ふんて雪ふ馬僧ふ蕗の塔　其角

僧まふふ出現の切目や蕗のふう　拙候

生てある蕗のふふ山路ふな　即章

その白し紙燭消ても好きのたう　調竹

茎立

茎ふふやふ五條あふふそ妻ふめ　百

多ふためそ蕗ふふふる州ゆき　野

泊賢ふ人茎ふふの園ふかふれしや　一雪

五加木

すみれ

吟りてものまやくそいひしまを五架飯　鬼貫

うこき頃こやらの客をのそきけり　几董

仏のきもはうねき去るの草この角　忠知

祢ぐつしと馬あくのくね草　荷兮

もりくけふ松のをふるく草うれ　夜章

草艸小滴あくひーあとやとれ　曲水

法度場の頃より内ハさ〻〻〻我　野坡

茅苅くすこれえり知と童ル　鳴雪

堤よりあうひ落れいすこれこの　馬莫

松くけあさくく硯のさ〻〻〻が那　如貞

さうね写もりのあまきれ草我　その

鼓草

はくしぐ

たんぽのさいてうかくれ日なるあ式

教草やうそそのまく杉きはくこ

あんはくの物いこの日を仏の坐　普松

栄春

衛門

ちこくくと橋やはまのやはくし　其角

はくくし頭巾にうるる初とあより　書江

ちこくくと親子はみうつくし　舟泉

春雨もたくき知ーたり土筆　孔志

ちこくくと案山子のけ久て太等　蕉雨

行蝶のとまりのこさまねあさこ〻〻〻紙

ちうこの野辺のあうみや隠形鬼　燭花

木瓜

草屋伏袋や野へめぐりうふ茶瓜の花
かけうふの底に燃るや木瓜のとる　　銭洋
芦士

戸角

ゆびさへ入くらの角出と濱の芦
法のくむやとろ〳〵後の鬼の面　后　　路通
勝重

接木

捨苗や梨の接穂やゆ山ゑ〳〵き
けまゝのかくしう祝ふる接穂哉　　芭蕉
世の中とまこうえんかきうね接木哉　　傘下
長れさや接木いとねの咲おくれ　　淳兒
一方を梅さく枝の接木この南　　清門
越人

獨活

雪間より薄紫のうとう芽ゆ那
せうゝなる分ハ痩ゆゑ獨活
ゆとゆゆゆ白ひきのくもはとうと　　芭蕉
嵐雪
配力

茶摘

宇治よきて屋風ゆ似る茶摘哉
柴舟の里ハ茶摘の水けふて
義の根やゆゆゆゆゆゆり生と業摘唄　　鬼貫
ちゝゝきや茶山ちゆゆゆゆ吸つれ　　其角
たうの風もとる日とゝゝふ業摘哉　　去来
旅人の一茶ふとちきる茶つこゝ有　　正秀
　　麦人
　　杏雨

菜 なたね

菜の花や一本咲しく蔓のもと　宗因
山吹の雪菜は色のかとち鳥なるや　芭蕉
なの花の小坂うつる角なりかな　其角
菜は花の吐愛にうつる日影かな　傘下
なの花の花は出るやわり蔓接かき　図水
なの花や枝葉の土手のあひくふ　長虹
菜のくれの畦うち残るうこの葉　清洞
麦のまあふ葉の花かくれあひしる　不悔

種蒔

菜畑や天氣定まって種おろし　其角
古河の流れとうとうたねおろし　蕉村

桃

我庵は伏見の桃の赤門くせよ　芭蕉
菓子盃にいくつ形や桃の花　其角
おのくの桃のむしろや等持院　嵐雪
ひるふ桃ふのるやふくえの桃の花　桃隣
あやもこもおもしのこそ桃の酒　傘下
桃折くくりのくやの子　羽紅
りくのそる境寺ふる垣根うれ　鳥巣
日の入や舟ふ見て引りのそる　一髪
金柑いまこ盛りなり蕊はそな　分我
桃さくふ中とたるまとりこの花　水鳴
角蓑の鎌ふのりとも桃はそ菜　鬼貫
桃の砧ふなりるこめとそこの酒　負安

海棠　普船

海棠の花はこちらより夜の月　卜宅

海棠は女郎と猫とかふろる　豊重

海棠の花にかくれる丸髪　甚角

海棠の花のうつくしやおろる月　史邦

海棠やお八ッうち出て堂の苔

連翹　巴静

れんきょうや茶は山吹と捨さるる　麦雨

連翹や柳ふ分る雪の　峡水

とんきょうの白しく庵の風味

梨の花　鬼貫

枝つくと人は立ちりみーのそな　許六

志のくとは妻に似ぬ梨の花　野童

春山や法師は酒に梨の花

杏　貞徳

杏のたるのうら　暮四

杏はそれや茶師の一ト分人

辛夷　羽長

辛夷紅もこそとやしの花なれと　梅車

ひふくれの鳥ふくりるふくりる

木蓮花　貞因

木蓮人は笑せんそれは天目れんけ我　安静

物いそれ花やりしく末まんけ

竹葵　鬼貫

草ひきやひとりは上はのれる　沾徒

ちさ麦の奥ふこしるるり離の夢　春水

一朝は一ばちちけや麦のいろ

苗代

苗代よ花のちらふや屋ふるとき　嵐雪
ふるふるや庵ぬれ行る畔伝ひ　宝角
遠ふるん苗代ころの田は稀なる　永花
苗代や八ツ頃佳ふる出雲歌　木也
人形へなふるふるまたてふる　元春
苗代よまるやかくるの雲の種　徳元
なふるふるや此土とかへして隅田川　資仲
畷道やふるふるの角大師　正秀
ちとくや苗代まふあふる風　仙化
苗代や法居人行てまとはえ　鬼貫
ふとふるるの橋ちりふるり　芝村

蕨

早蕨や谷の雪ふふとふる　貞室
里人と相まんとふや独活ふる　宗因
菜刻この上まとはる蕨この角　其角
ちまんやの久菜のさら山ふる蕨　幸頓
ちるふふまとさけまるつふる北　勝政

蘇

関ふて蕨も蕨ふふふ我　宗祇
白蕨と砂味ふふふふ雫ふる　其角
小坊ふふ見なけかふん松よ藤　嵐雪
風なふて蘇ふきふふちの巻　杉風
蕨の棚やふふふふ人のさふ氏　貞室
松よ蕨鮒木ふのほるけふのり　宗因

山吹

ニーこゝろふる居の後のはるゝ哉　荷兮
とゝも世と後ふ條〻〻墨こゝろ　宗波
山藤のうとのゆゝ多ゝ机の角　去来
あらかく岩うらゝゝ後のそゝ　丈草
後やたゝ君ふれるもとゝ　その

山吹や三よさゝき枝のなゝ　芭蕉
月雪ふ山ふきゝ花の素顔よし　乎角
山吹の衣ハ黄金の肌ゝ角　季吟
やまふゝや垣ふ干る蓑一重　閑指
一ゝうと山吹のそゝ夕ゝ　徽雪
山吹もちるゝふの舞ゝまゝ　洒堂

躑躅

とりのゝて山吹の岩根の角　蓬洲
山吹と蝶のまゝれぬあらしゝ　卜枝
やまふきゝやゝえあふ蔦の玉ゝ　貞室
山吹やさゝうて雑ハ多のそこ　鬼貫
やま嬢きゝやたゝ久て落る花の水　半残

花ゝもあふゝゝ赤ゝし　宗鑑
裾山や虻吐くあとの夕躑躅　芭蕉
赤これより木ゝ一見のつゝしゝ　其角
白ゝしまゝ岩ゝゝゝ角ゝ　嵐雪
ま一ゝゝゝゝのかゝゝつゝ山　去来
さゝのゝく窓ハゝゝの日ゝ　丈草

はしさくらしろやちりきし石焼 　桃隣

山つゝじ海にみよとや夕日かげ 　智月

かうしほく浪白しまつしまね 　木花

花ちりてさまもよしや岩つゝじ 　幸茂

あちら見れつゝじの露や羊の乳 　貞室

鶯

鶯に蔵あるうけのちやしのみ 　芭蕉

うぐひすや氷らぬ音を朝日かげ 　其角

黄鳥や茶の木畑の朝月夜 　丈艸

うぐひすや内のもうけの踏はづる 　去来

鶯は中とこそこれ小もちり降 　嵐雪

うぐひすの飛ぶ方の雲ふかく翁を偲ば代 　一桐

うぐひすや〳〵一声のちぎり哉 　溪石

鶯や窓に色さきなこのあら 　魚白

うぐひすや籔よりそこは御入水 　鉄枝

鶯や門はたまたま豆腐うり 　野坡

うぐひすは花にも級こゝもとあしきたれ 　梅舌

鶯の二声にてよな川くゆるゝ冬の中 　心圭

うぐひすの声に記りさくめかな 　桃隣

うぐひすの音の書やつまりて雪の縁 　桐雨

梅遠や鶯つとてかせうそと 　山川

うぐひすに見しても なきや新茶茶 　夢々

鶯の井ちらひさえ籔も捨られし 　一笑

鶯は藤にゑのるそぞん縁の角 　惟然

猫の恋

うくひすやまいたゐ生る声のいろ　宗因
うぐひすの小枝よ巣くとしく　鬼貫
黄鳥や園栖は翁の笛の音子　貞室

麦畑ふみつぶす恋の猫の道　芭蕉
うき友にかゐ見て猫のそらなりめ　去来
深窓の頬も紅ゆるやひさう猫　圃指
葉多くくらくて猫のれんりうお　牛歩
巳ろ脊ぶくろ猫のふりかけ猫　秋色
なれも恋猫よ伽羅焼てうれそり　嵐雪
見ぬ恋を妻とふ猫と雪の中　其角
淮南とも朔うと歳を編は数　沾徳

白魚

猫のときあくしの貝や瓦おそひ　琴風
うき恋ふたくてや猫の盗くひ　支考
のら猫やうかれゆくあと秋の中　丈草
うき恋濃茶分のおつけ猫　野径

白魚か價あるこそうみなを
ちゝ魚や漁翁ら蚩まハあひるつら　芭蕉
ちゝ魚の舟ゐるものよ水の泡　其角
白魚の白き白ひや秋のはし　貞徳
ちゝうをやあかゝ細しま　之道
ふうをの骨や式紙う大江ゆま　拙假
白魚や目まてゑ童貝へ魚　荷兮
白魚　鬼貫

鳥の巣

巣をとらふるや世とある一下造化
巣かくるやおるまれひろの書かくを
巣をとし〜多くの子をちふる狐をを
多の巣ゑ去年のをゆをを花の声

昌房
之次
一雪

人ゑ逃げ人ゑ訓けり雀の子
鬼貫
魍ちちふなるとてすゝめの子飼ふ和
何瓢
荷鞍ふむまえのとゝめや縁の先
士芳
日の新やこりくの上の狐すゝを
珠碩
嘶々や愛ゑ数ふるね村をゝ
宗因
知もちいゝと年の冠の百ゑ多
鬼貫
玉子鳥都〻別の日和の有
尚白
門上ハ桁ゝ掃ゝ〜ちとを
其角

雉子

父母のをきゝゑ雉子の聲
芭蕉
人うとし雉子とゝゝ山陰犬の声
全角
鶏の多かゝ〜かゝらん父雉ゑ妻雉
夫来
何のをふゑ新を移ゝ〜ゝ雉ゑの照
丈草
下道の声さそあらん自部雉子
嵐雪
高声ゑ法〜とあゝ雉ゑ和
一雪
おりゝ子と呼ゝゑ似ゝゝ雉子の声
千那
行かゝ〜ゝ塩縄といてゝ雉子ゑ有
塩車
分ふゝゝゑ雪間の雉ゑ妻ゝ
撒土
一夏ゝも之声もゝゝ〜ぬきゝゝゝ郎
衛門
ゝゝゝしや麦ふむ科ハなゝ〜ゝ
言水
ゆゝ〜ちのあゝ〜ゝゝや雉子の声
鬼貫

雲雀

雲雀よりの上ふまとゝふ峠の茶あ　邑薫
あふのきよ縁てうん路辺の雲雀うゐ　除風
朝ごゝふはし初ごゝろ面根のそら　文草
逃ゝて〳〵雀ゝ也けり夕初ごゝろ　翠袖
羽ふらけてゆく〳〵への雲ふなく雲雀　滑橋
枝の木を定規ゆのゝる雲雀う角　水花
恍けらのせゝよりおゝとひゝり小　甚角
ゝゝもまゝこ障子ゝゝる日を帰初ゝり　如泉
葉橘のゝゝゝゝふおゝちる雲雀ゝ　言水
口ゝゝと雲ふかけゝるひゝりゝる　梅盛
初虹やあゝひゝゝりのちゝゝゝさ　素堂
篭ゝ入ゝゝゝゆゝ浦へゝる雲雀ゝ　宗因

帰雁

そゝゝゝも北へ帰雁の山路の角　負室
あゝゝれやゝゝゝゝゝゝゝゝる雁　鬼貫
ゆゝ雁や初ゆゝをゝゝきの高かゝ　水哉
雁帰てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　未山
小田久を鍬も桂やのゝ体雁　甚角
かゝる厂峯ゝひ紙ゝ勢ひなゝ　嵐雪
立ゝゝゝ今や紀の厂い世の雁　沢雉
行厂ふゝゝ一ゝゝゝゝゝゝゝ　几峯
ゝゝゝ雁ゝれて周防のねりけ瀬　撫子
ゆゝゝと田螺ふゝひてかゝ体雁　子英
かゝ体厂冨士の裾田の沙ふゝ　長雅
ゝゝる雁田毎ゝ月の曇る夜ふ　薫村

玄鳥

簾に入りて美人の御前に燕の
舞ふ裏ハ法ゐのかうしに
あそぶともいとも忘れねる比
傘に祝ひかさうよねとてる
法ゐの雁に同てや鳴まわる
美濃ふ立出されし法ゐの
いま来ることいとなつの玄鳥ハ
燕や田をとりかへ馬のあと
巣の中や身を細くしておや燕
かくけもの行くものつくる角
土事引まも休む法ゐあか那
船綱はゆくゆく仲の乙鳥ハ

嵐雪　凡兆　去来　其角　丈草　嵐蘭　俊似　野童　峯嵐　梅雨　舟竹　巴山

駒鳥

琴のねの巣もこそくるる法ゐ哉　枕角
老僧の手炉ぬくるまで燕ゐる　合志
ゐろ紬ハめくるくゆるつくめる角　小春
こ法ゐの声ハ仙合しき白浪哉　長虹
朝あけや人見そめて鶯の唱　捷花

鶯

鶯なくや赤襟ゐめと日影の伝
横木ハ鶯くうとの声や　吉野琴　圃指
鶯の雪降ゐやうその琴の音　三章
鶯ゐ法ゐき尽ゐとき法ゐ法ゐ哉　山只

麦鶏

ゐのことなく鶏ゐ麦の夜明ゐ家　沾徳
　　諏竹

蝶

蝶のとぶばかり野中の日影かな　捏拳
狂ふる蝶よろしくまゆとゞまるこゝろに　其角
うつ蝶ぞ兒の手出をなぶりかな　栖風
蝶の羽おつる露ふるゝ朝かな　園指
とはりても翅きらさく胡蝶かな　柳枝
蝶のきて知とよ狂ひけり葱のきわ　手銭
初蝶もふんでもおく苔こへ二年かな　好春
かやらの中に紙出る胡蝶かな　炊玉
枯芝や若草に狂ふ行こてふ　百歳
室藤して花にせいしき胡蝶かな　雪窓
沖の蝶波きときまで狂ひけり　文曹
世の中やてふしとあれかくもあれ　宗因

蝱　蜂　蜆

花にあそぶ虻なくらひそ友すゞめ　芭蕉
この虻はふとくて逃るを捕りかね　其角
人もきて長き日は忘れ虻の声　星泉
糸さらに虻をしかりてあぶじるさ　乙州
蜂の巣や留守とて花は盗まれそ　杜洲
まろそしや花波に蜂の往かへり　園風
山吹に行はからんでそちの声　沙鳥
そちの巣や一間くらに兄弟　蘭二
野田村に蜆あえるり茨のとほり　鬼貫
石一ッ清きみうれや蜆さるみ　其角
蜆くふ鍋ぬけもとてね去年のかれ　歯亭
あきちらら切るそろる胡蝶かな　好真

蛙

芭蕉
嵐雪
去来
其角
丈草
杉風
立齋
嵐蘭
越人
仙化
蚊足
戈磨

古池や蛙とびこむ水のおと

よしみやさとの芽とりかくる

田の畦や虹を脊負て帰る蛙

ちんそう湯はみそのるあさこの角

松風とうちこしてなく蛙の声

山の井や墨のさとふくむ蛙

まとうひて柳ふのるかくるる

きろくと我頬まりるこのうれ

めろまくもろろ〜さそふ鳴かくれ

ろらひふ蛙はくそふ浮草の声

尾を落くまさ帰ぬ蛙う角

とまり江や火と焼舟ふる蛙

田螺

宗瀘
鬼貫
宗因

芭蕉
丈草
嵐雅
交浪
其角

其角
知足
陽和

くまとはいて暮ゆくかくるる角

かくら井戸へとひそこひし蛙ふる

暮の道ふすれもさし出のかくる我

袖よこそらん田螺の流土のひ函とうこ

入彩る鰥も死ぬ田ふしからく

里人の騎おとしらる田ゆ〜ふる

行雲の中ふまし多や田螺とり

景政ゝ片目とひろふたるし我

孫とものの蚕中しるふ日向の角

蓐でもきて答ゆてそこそる蚕我

くきおろと多るの羽かるし波蚕

若鮎　芭蕉

鮎の子は白魚おくるひとえ　角

若鮎は殆の一業に足ぬあり　支考

水流さ〜網の目ぬき小鮎うち　重政

鮎小の面瓶の栗不氏乳房この方　素堂

飯鮒　来山

いもだとのかあいやめれて果るけり　汐徳

飯鮒のおのれ見くふ河内越

落角

一の谷さやまる鹿やおとし角　一夢

角おちて交とみまゝや庭の鹿　琴風

つの落しかやもうるおくれ友　迫之

角おちて二日まゝ男鹿うれ　朱柿

佐保姫　可理

さをひめや京うぐんへの寄の田　如流

佐保姫の後くゝ硯や筆の海

ひのき　貞徳

ひのきてふ実初のはしのもろ人付　鬼貫

ひ〜くゝや大和西月こかさまま　言水

命はを貝酒ゆれひのきを月　揚水

待中の西月ちくやくゝり月

たをさ　芭蕉

たをさうふのまくきくふ死の嵐うれ

きさくふ死の自夜ゆ袖人業は苗　蕭山

ら武

二月の雪とけておつるやとろも川　之次

きさくてくきれそるやさ蝶の羽　惟然

きさくらぶやタハあり稲と押灸　千那

弥生

雉鳴もやうしの海の道千鶴　露法
三月や冬ぬけ〳〵きぬ楽一下木　去来
さくらちる弥生五日八忘日まし　其角
富士ぬ添のて三月七日八日うき　信徳

左義長

左義長やことしの相武常狐　旭芳
左義長のそらゆもそとら霞武　幸以

霞

小泊鶴や眼流もうもの嘉哉　宗因
ぬふこゆもうろや湖ぬ出うたと　鬼貫
里かとゆゆ人武松のけうりか素　野水
行〳〵て程のかろ〳〵れうとみうれ　墨交

花と少て初へ志こと心かとこの角　嵐雪
三帆舟志塩房ぬうるうたみうれ　其角
うえうえ且ぬ出襲ぬ〳〵夕かとと　越人
流そうや歩うも歩ゆうきそ体霞　岩翁
破見浦とうきう〳〵かうる嘉うれ　子英
うとと茨てかう〳〵け武初うとと哉　冰花
浦〳〵の家ぬ帆かうるぬとみうる　風洗
我宿もうそよりうれぬ霞ぬ素　月下
八重かとと奥、うそそ体竜田武　杜國

臘

月

唐崎の松を花よりあはるゝ　芭蕉
多のしさよ簡のめけくの臘月　去来
大原や蝶の出て舞ふあはれ月　丈草
あはれ月まことそなるさはれ所作なる　仙化
たけ山や籠の月はしとしとと　式之
中川やけうとうとんてもあるる月　嵐雪
山ゐひや左りへよりてあはれ月　元峯
夕かとみくとて臘とまうしの　角弾
あはれ夜と白酒うりのさとり　支考
臘夜は酒ゐや[illegible]人猿の声　沾洲
たはれ月茅舎[illegible]煮[illegible]ありうる　支磨
臘くとり火[illegible]や淀の[illegible]　鬼貫

几巾

籔入

ゐの名は鮫や古郷のいろのほり　宗因
かろくやはは戸火[illegible]几巾　其角
糸ほそる人とあちこやいろの[illegible]　尚白
夕くれのりめうきに雲やいろのそり　支考
いろのほり酒のあしくるかとうる　しらし
いろのそりまくあもさもや潦　園風
やふいりやひとうつはあるうるやさん　其角
籔入や浅草うけて芝の海　琴風
やふいりやあはれ月歌の酒は砕　寿吟
籔いりや我歌うるのしくあけふり　咫尺
かないりの爰や小豆の若るうち　蓋村

餘寒

花もまつ煙ぞたてる餘寒の春
ひまなきの陰おきし山さとの
俤ふの藤代さへ人の籠寒くて
篝の戸村史降ちひさき餘寒哉

定義　其角
野童
芝村

霞返

雷やひとむらきあのさえかへれ
さえうくかいとことあたゝめるうる
る帝て燒野のあられまぢるうれ
ぶ色くゝと燒野早さいつくひえ
山ゑるゝ小松の殘る年けぶりの春

夫来
橋盛
乱糸
曲之
飛木

燒野

雪間

うき中ゆるれて雪間のよりあるうな
光陰の矢間あけくる雪間の春
草莖ゑ色ゆ雪ふもなほ雪ゆ哉
酔さまて春菜摘ふき雪間ゆ

そて
兼次
其角
万子

殘雪

木枕の垢ゑ伊吹ふのとるゆき
かゝゝ消て富士ゑ裸ゑ雪殘
雪殘る巻獄ゑゝしき泳生ゑ春
舟くゝの小松小雪の殘てけり

丈草
其角
含吟
旦来

東風

軒の雪盗人あゑの取のこし
徐ふ東風入る雲のいちきうれ
暖簾ふ東風ふくいせの出店ゑ

負室
去来
蕪村

春風

春風や人声しらぬ所より　山　芭蕉

そよ風ふこそよそよ雛の駕籠の元　荻子

麦うせふはきもさらねば羽織ぬ　亀翁

そよそよ勢ふ吹出されぬ水の胡蘆　夫来

はる風や堤こしらるゝ社声　来山

世そよ殿の法師ゐ薮や春の風　蓼村

雪解

北國の貴族凡まる書消ぬ　泊徳

雪消て大声あらる小ゐゐ車　椎葉

松の雪きえそやや声をあげ人山　春湖

雪しるや蛤いろを出のさゝ　木白

きゆる時ハ氷も流るゝ堤るり　路通

氷消て風ゐおゐられそ流ゐまた　の

麦雨

不性さやかきもとさ直し麦の雨　芭蕉

そよるさゐや田長の麦の鯨うり　史邦

春雨ゐ社ゐるや軒ゐなくさく光　羽紅

はるさえそや山ゐる生ゐ雲の門　猿雖

雲雨や何ゐらいん嵯峨家房り　丈草

そよるさゐのゐう吹ふ馬のけゐ我　堤亭

麦さえそふ九ッゐる枕この南　秋色

そよ殿ちゐ寺我ゐまゐひの行所　芥舟

はるさえそや初しきりのゐハ結つし　甚角

麦さゐや枕くゐ新くゐゐゐ本　支考

状ゐれゐ江戸も降ゐり麦の西　鬼貫

春雨や新ゐ川人社ゐ殿ゐり　貞室

春雪　来山

酒色ゆきそめてゆきけり夏の雪　風麥

波雪や鶴ふおろす海は空　直重

ふるけさとことしの初の春の雪　李由

下苔の氣色とけそめやまの雪　貞室

かな山やけふ〳〵の河ほとり　鬼貫

春日　其角

夏の日や蝿ふ雀の砂あびて　治德

如意海や鮫もかくれむとすらむ　其角

松格も春日ふめくむ石のあや　蕪村

春夜

夏の夜や草洲を鞭の蛍とり　其角

春は長し尊死山雨を守る茶　蕪村

海

青海や寄せ敵ゆきまる夏のこゑ　素堂

又はけ行遠山雲や春は海　芳川

松陰や旭ふゆくそれの陽　不卜

春の月

夏の月琴ふ物かくそめられ　其角

春ふ〳〵雄岩なりけり春の月　治徳

春月や市今堂の木は間より　蕪村

夏は

鐘はけうねさとふ仏ちる夏の雲　芭蕉

立蛍て淋しかりけん夏のうれ　普船

赤猫のうさくなりね夏の月　山店

蛍や根ふまくはくの春の暮　貞室

春の野	ふりあるる鍬のひろうや春の野ら	杉風
	るの野やいつれの仲ふりふるとん	羽紅
	蹴ハ舞雀ちとる夏野ろ角	貞室
春雪	るの水ふ秋の水はなるとなるとん	嵐雪
	春はるかろく紅書のるる紙しらん	其角
	物ゆるし奥の児ろれ夏のろ	沾徒
水ぬるむ	水ぬるむとろやる鍋もむり縞き	阿誰
	汲ふ出く髪とく水のゆるろ角	文水
海雲	ろろくとふ名ゑゑふ近き朝日ろふ	峽水
	さのろろふ流雲まちしろろ横	抱月

海苔	かきよりも海苔とハ老の養もせて	芭蕉
	海苔とくく水の名ふとを都鳥	其角
	人のるゑもとくれてのちや備のと	杉峯
	まのりやうしをふほらん磯訓変	尺草
寒食	寒食のさとろふくけふそゑひ北	桐雨
	ひゑの火も寒食の日ゑ腹立て	水花
	寒食や旅人の雪の路きとを	月下
	今宴とろゑ宮食は家ろハ自有表	其角
雛餞	雨のろゑ雛とさろゑや草の餞	芭蕉
	伊吹山雛餞る間もそ仲は餞	政玄
	くき餞ゑろふハさくきも壮の白ん	埋然

陽炎

枯芝やまことうまうまうふの一二すゝ　芭蕉
うけろふの抱付いてもろもろの角　越人
かまくらの山や巖ゆとしてはたらら　配力
陽炎や見めぐりあつく廣り驚　去来
うけろふのあさし矢の流れ中比　山川
めもるうふの登とを炉中の煙さうれ　達暑
陽炎やふ隣の業さ人とをうふ々り　丈艸
くけ縫ふや障子かもろふ金屏風　普船
陽炎や小磯の砂もふきこそそ　甚角
かけろふはタ日にいろ比ふり我　舟泉

糸遊

糸ゆふ糸ゆふ比ふけるけふの北　芭蕉
はくくと糸遊やまめむとうふ　支雲
いと遊やあくまを廣の人はうの　乙州
糸ゆふやはをめひとを鍬む須　冰花
いと遊ふや左りくえろさけの胴　鍬支

二日灸

小窓照る玄の日ふ日二日灸　その
二日灸花こるいのちたふなり　九董

そろ午

初午やさん銭よみハ芝居うら　甚角
そ門午やあれせんつゝもるひとし　支考
はつむまや鍵をくろえて戸雨　野坡
初むまや稚くまは たゝうちつゝみ　川支

彼岸御忌

なん年やほとゝぎす霞む通り節　左圖
初午や妻の影ふむ素浪人　沾徳
なん月午や役の行者はだゝぬ路次　壺月
初午やその家ノくの紬ゝみ　蕉村
精進ゝゝるとゝいそれ釈の日岩ゝ形　素山
彼岸ゝくひゝん橋のちりゝまり　彫棠
波ノ永武士ハたゝまゝる彼岸式　其角
橋さくひゝゝん孫陀の知ん加系　支考
法忌まゝり都ゝ錦珠数袋　言水
御忌の鐘ゝゝく谷の氷ゝく　芝村
日ゝ霞月ゝ氷ゝゝや御忌の鐘　几董

涅槃

神垣やむりゝゝもかけを涅槃像　芭蕉
さる仏とゝ千ゝゝ物ゝゝゝ仏　宗因
孫子ゝハゝゝまゝて涅ゝん哉　荻子
きゝゝゝゝの日ゝもゝゝや十五日　鬼貫
このむゝゝ常のゝゝく涅槃像　野水
ねゝん金ゝはゝゝゝ赤ゝ日の光　言水
天人も泣ゝゝゝゝ涅ゝん像　己百
釣瓶の大変あゝれ涅槃像　希因

西行忌

西行の死出路を旅のほゝゝゝ　其角
西行よ彼岸さくゝゝゝゝゝゝ　杜若

永き日

春のおそき四谷をたけり　蕉雨
永き日は遠近人となりぬよや　芭蕉
臘法のなのそらをつるる長き日を　元峯
日さしは伝へまるる遅き瀬田の橋　許六
永き日は遊び疲るる大津絵　宗因
なつ日や子ふかいろくタうを　鬼貫
　　道春

出代

出かせやその門を雛辰の市　嵐雪
お暇や照日ふ下結をとりて行　知足
出かせの間やめをとの花のとも　浮萍
出かせやにをの絵り遊女の果　幽山
お暇やあのなるとをかちは者　蓼言
出かせやり人ふ図司王丸の舞絵　粛山

出かせやせんも連元うら　其角
お暇ふかせるや製のゆくえ　木導
出かせやるさめくと古舞絵　蓼村

雛

草の戸もさみかく係代を雛の家　芭蕉
旅ゆきてあそふや雛の多ること　車来
こそろふとや都のひるふ夫婦連　鬼貫
隣〳〵雛見まろはく小家うの系　崑雪
うこそとりて移ひまさりを雛の穴　其角
夫婦雛むすとえの　ひ　せん　達暑
勅ゆね成りのとひなりうふの雛　霜白
山海の櫃うふく　こよ云る遊ひ　ゆく

鷄合

ふかうもの中よりいでし雞のあそびかゝ　笠下
あるとりは獅子ふるそゝぐ逆毛哉　其角
勝鶏の世をそゝぐ流れ抱き上り　言水
赤いのゝ五位は上りとり合　君里

汐干

犯あふむ比目を踏んもとほす干うれ　其角
汐干かれて蟹う裾引なとりかれ　嵐雪
人うまむ舟と陸とゝの汐干う南　友重
ふ川ゝ富士のかけなる汐干哉　圖指
き潟よりゝあの汐干や田植そ　介我
帯わとゝ川はゝれるゝ汐干哉　治徒
鴛鴦うて浦路のゝん汐干うゝ　如泉
沖ゝゝゝ足めとはゝる汐干かゝ　桃女

馬刀

一の洲へ都の客と馬刀とりふ　鬼貫
ゝ莖の馬刀うきよせん筆の鞘　嵐雪

曲水

曲ゝや見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　其角
曲水や岩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　希因
曲ゝゝ椿ゝゝゝゝ山路この南　大兎

畑打

畠うゝおとゝや嵐のさゝら麻　芭蕉
ゝゝゝゝと畑打そゝゝゝゝゝゝ風　好風
畠打や傍ゝ雁はゝゝゝゝゝゝゝ　路茂
畑うゝやうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　蓼村
ゝゝ打ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　秋之坊
畑うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　乃雲

人の世や長閑なる日の寺林　甚角
扇付は貧世ふるりぬ冬閑も　冬文
のどろさを物もむりつね朝蘇うれ　杜國
長閑さや空ふいくんもるの声　雨什

別霜

ふく病ふつれうきを霜の別しの茶　千那
初夜後歩の綾つ紅を霜　松吟

峰入

峯入や一里おくれ小山伏　芭蕉
うを入れ花踏てもれ素足う菊　六亀
峯入や雲ふ起臥ときんもあり　重頼

行夏

行夏や多る帝魚の目をるみと　芭蕉
ゆくるや猪ゐを雄島のいとれ貝　甚魚
明ね間ハ星も嵐もるる社りち　丈草
行るるふ底のゆけうる社ち有　支考
うちうくね名を引春や観ちと　暮四
引春ふ頼忍なふかうの門う素　湖春
ゆくるも仏ゐ社の都守うる　野水
行はるや年さうふたく鐘の声　山川
ゆく夏の夜を祓ね歌の離うら　鬼貫
行夏や横河へのるらの神　芝村

古人續五百題歌句集

時鳥

夏之部

うくひすの姫ゐるねやとくきけば　守武
口あく水鶏ふなくなく郭公　宗鑑
ほとゝぎす大井赤そりる月夜　芭蕉
夜の涙とりしく白し本やきの　鬼貫
なくくふきうく　矣つくいうふ子規　さて
たゝもうれの聲ハつくうひうゐとくゝ　貞室
蜀魂すみ川やら淀の水そうま　一幽

在明のおりてあとをとゝめやかとゝのとゝ
御成敗いうなほとゝをもちをゝ子規
ほとゝぎすを神楽の井を通りゝり
貌を谷ふかい山のすのれほとゝぎすと
ちゝけすきふ帰り郭公〳〵
鳴るその日〳〵のそろ稲う有
杜宇とね夜かとうくかゝら光
うゝれ出ゝ山久とれゝ蜀魂
とゝぎすんさまゝうみやこの子規
馬とうゝの合りをとゝぎすと
ふゝりかうゝ丸〳〵きほとゝぎす
敷瓦ふきゝ森さめうゝや時分

其角　嵐雪　玄札　正由　利冬　尚白　宗因　去来　丈草　鈍可　傘下　一髮

ほとゝぎすとゝれゝふゝ夕ゆめむ野の虎ゝ
もゝ一子のロ生の仏をゝや郭公
目あゝ青紫ふ山をとゝきゝ
ほとゝぎす一声ほゝ雀の声
石菖の朝露かゝうゝ本とゝきゝ
四五月のうゝのゝさ浪や郭公
ゝゝゝゝゝゝゝゝ定まゝふね雪の雲
松島や鶴ふ身をうれほとゝぎす
星のゝ川帰うゝしまゝや罵蛙
杜宇なゝ稲ゝゝふね月夜うゝな
湖をとゝかゝゝゝゝやゝゝゝゝ
ゝゝ係まゝゝゝさゝゝゝゝゝ子規

柳風　松下　素堂　杉風　惟然　詩六　卯七　曾良　園友　朱拙　桃先　智月

左右ハ山郭なりけ〻ほとゝきす
郭公なくなり秋ハ朝鮮山
雨の間を常ふきたりほとゝきす
附るまゝくねとゝ鶯のなりもあり
おりひこと森をあらしよ郭公
常ゝなく麦もなひくうあとゝたを
附鳥窓ゝらうしくく人をあ
青くもや舟ハゝ雨れ子規
高ゝやあれゝ中の杜宇

野坡
支考
風國
荷兮
北枝
正秀
土芳
素堂
洒堂

閑古鳥　老鶯

常出してゝあロ志ねかむこ多
谷こゝや空ふく風のくこ多
閑古鳥の声ハ脉る山路ゝ家
分けハ俳ゝ常ハ俳ゝかくこ多
風ふゝね森のあらしや閑古鳥
拙ゝゝ志山田ゝ青ゝ宗古多
かくこ多常や蛙の目かりとき
草卧ゝ芝ハ稀ふゝし雨古多

山中やうゝ和ゝと老ゝく小六ふし
ロ芝似ゝ老の鶯ゝとりこと

鈞壺
乙州
鬼貫
甲斐
其角
舟竹
洒堂
正秀

支考
宗因

蔭を入

うらびたる音を入あゆゝ二ッ星　嵐雪

蔭や寺を帰こんと喜怡　回水

蔭雀

ゝ鳥や日のさし廻る汝の庵　錦水

よゝきりも小野とハらハし蔭の中　行雪

紙ゝの移りし我をきゝすし　芭蕉

翡翠

河せみの玉とよ森そり蓮の葉　業言

翡翠に折うけ竈の支森の系　酉花

羽抜鶏

羽ぬけ鶏常ぎるえうそのつゝこ崎　其角

ぬゝもの枕ゝそなるや羽ぬけ鶏　希因

鵜

鵜の名ハ鵜のあもゝふりのゆの舞ゝ　其角

鵜とゝもゝおゝゝ鵜ハ水をくゝゝ行　急貴

見物の火ゝゝゝゝゝゝゝ鵜ゝる　去来

養望もゝら鵜ハゝゝゝや川ゝゝ　李田

曲江ゝ舞のゝゝゝゝ鵜ゝ鵜の有　梅餅

先舟の鵜もかまハね鵜ゝかゝ　淳兒

鵜ハゝゝの尺ゝゝゝゝゝゝゝ　独卜

鵜縄ゝく淡ゝゝゝゝゝゝゝ　桃隣

鵜数小早瀬とみのる鵜ゝゝ　圃指

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ鵜匠のゝ　琴風

ゝゝゝゝゝゝ鵜も眠る夜明ゝな　氷花

あゝゝゝゝ鵜とゝゝ合ゝゝゝゝ　尚白

水雞

埋もれてあまりかおりの水鶏かな　土芳
おのゝ絲の尾やあらぬ籠式儀の園　丈草

水札

幕守の宿をくもるの間そうの
あいとりもちちく附ゝ水雞ゆく　芭蕉
うゝ絲より度りかゝるとゝ鶏共　去来
雪のに啼くく曇るや鶏ゝひる　半残
水札啼て日新ちろはく流この角　北枝

あしの巣

けてるのて神杉ときこゆるを水　一泉
うちゆや啼の深巣ふなく蛙　尚白
亀の脊ふたゝまの啼の深巣ゝ　甚角
鴨社巣に夏蔭かゝと小西ゝる　青山
　　一桃

螢

おのゝ火を木ゝの螢や花のゆと　芭蕉
わゝる火を吹とゝされて啼の闇　去来
義はゝて朝ゝくふゝる蛍ゝ角　嵐雪
牛部を蛍ゝ蛍ゝ蛍草のはゝる式　言水
はゝとゝ蛍のゝゝ谷のゝ　丈草
相の蛍ゝ息さゝなる蛍ゝれ　史邦
草ゝも木も蛍ゝゝゝゝの音　正秀
田の町は夏はゝひはゝるゝ　万乎
かゝゝゝを生れゝきゝ蛍ゝ奈　猿雖
ゝ汲てゝれゝ袖のゝゝゝ角　嘯岱
あゝの夜を下ゝゝゝ蛍ゝ蒼　含昭
夕闇ゝはゝゝも蛍や酒ゝゝし　水鴎

水辺を舟そなる見切ほそく郭　宗因
薮垣や卒都婆のあしを飛蛍　鬼貫
石山べまことそ郭しきわらふ角　嘉元
飛くゝ切筋ちらふなる蛍の家　袁立

蝙蝠

蝙蝠や宇治の晒ようとくすりを　其角
たゝ苦しゝ夕ゝは月ふきこ風　子英
かゝそりや向ひの女房こちを見る　蕉村
蝙蝠や月はあうりを立さる　暁臺

羽蟻

羽蟻とるや富士の裾野の小家ゝ　蕉村
ゝんてゝんを近道をとるたゝりゝ　林秋

明松ふるゝゝ樹ゝなくなるゝゝ　芭蕉
あまかゝる桁を落く蓋もゝ　其糟
笑ふゝ常とおりゝふるゝゝ　涼岱
ひきをふんて夜の卵は花をみ意　其角
憂き附ゝ蓋きの遠きも雨夜哉　晋良

蛙

子子や流くゝるのゝ川とまく　氷花
ほゝふりのゝくゝや浮世のゝ川せ貝　重厚

ひきゝ

蚤ちゝみ馬の尿をゝ流くゝ元　芭蕉
隙あきゝや蚤のゝくゝ行耳の穴　丈艸
川越や蚤ふゝ樓田川・　影堂

子子

蚤

蠅

夏は甘し

うたゝねの旅ふもとなる人木蔭の蠅　芭蕉
かはるがはる飯粒をくへる人まあり　嵐雪
蠅よいかる眼よ力なき死ぬる森の松　子堂
殊数くりて蠅打人の足ぶまこのあ　雨軒
浦風やなくうらぶれ人のそゝの夏際　岱水
夏人形打その手枕の袖ふりこの糸　巳百
うゝ〳〵きまく子の点は蠅うゝん　紅雪
甚しさや無茶ふうり行午の蠅　九節
電のさ我〳〵ひ出〳〵てやとりゆ　丈草
あふ夜はや鳥もうゝね雷ふ火取虫　翠柚
夕立ふとまりて夫とり虫　正秀

蚊

蚊柱

雷の蚊もはゝ〳〵と鳴る八声の船　其角
蚊をうけて祝の鼎やはゝきと　鬼貫
旅人やあうりきき方の蚊柱ゆく人へ　治荷
血をうけしりめとゝとゝと蚊の蚊さ　文章
蚊の群〳〵柳の一木の墨ぎり　小春
子やゐうんその子は蚊も蚊の食ん　嵐紫
蚊の中せ〳〵鐘のうゝとまりけり　一笑
祇やの蚊や御佛供禁ゆゝ生〳〵行　鈎雪
蚊をゝろと中ふ蚊帳の旅森ゝな　昌碧

蚊柱ふ大鋸屑透〳〵夕部の角　宗因
蚊とゝしらふ夢の浮橋かゝ花ゝり　其角

蚊遣り

蓑蔭して香てゐる草の故郷哉　去来
故郷や斧を女の石ばうり　嵐雪
蚊遣火ふ蔭ところせまくなりまさる　杏雨
ゐやり火や蚊を焼る方に老ぬとく　其角
指ゐひし嵐も出ぬ草の戸を念佛の中もゐやりゐれ　鈍子
　　三翁

牛

蝸牛角ふりまけよ須磨明石　芭蕉
枇杷の葉ふを上ゐ角なき蝸牛　其角
世ふ法れて路ふみまよはふり　太元
ゐゐ露や角に目をのせうきまる　嵐雪
牛角ゐく蔓の先ゐ紅ゐ那　水鷗
我むゐし蝸牛ゐ法ゐ　鬼貫

蟬

撞鐘も ゐゐく ゐゐ ゐゐ 蟬のこゑ　芭蕉
蟬の ゐゐ武家の夕食ゐゐ　釣雪
ゆゐ ゐゐ ゐ 筆捨松ふ ゐゐ の声　宗因
ゐく蟬のその木ふ ゐ ゐ居ゐ ゐ　鬼貫
捕ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ　昌碧
ゐ ゐ 蟬や麦ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ　嵐雪
啞蟬のゐゐね捕ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ　杉風
月ゐ ゐ ゐ夢ゐて飛ゐ蟬のこゑ　正秀
ゐゐみゐ ゐ ゐ ゐ ゐて眠る松の下　可吟
吹ゐ ゐ ゐ風ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ蟬ゐ ゐ　如行
蟬ゐ ゐ ゐ 市獄窓の昏射ゐ　曉鳥

蜜

鬼灯のからをこはしや蜜のから　其角

蜜せうや石の鳥居を啼捨し　一井

蝉

蝉のかくれはてしてかなしさ　句空

目の玉をとりて出るや蝉のから　卧高

鹿の子

破垣やそこと鹿子のかくれ路　曾良

もてそこしき角ぬかるきし鹿子ぬ　捌豊

鹿の子や麻疹出まくる青葛　野坡

更衣

一ッ脱てうしろふもとねるもかな　芭蕉

はふるともしらぬ花の更衣　正式

春と夏とをさへゆきくる衣こそ　鬼貫

麻疹見もかりのゆとりやる衣　宗因

すしの出てくる布子袋花しとろもかな　杜國

扇屋の暖簾をろしとろもかな　嵐竹

もろもろ人をとろくるあるね罪深し　その

罪ふるしのまくすこ藤なほ衣こそ　一有

天衣襦もをくくとやたくふきよ　傘下

ちらくとかくとおほくよ衣このへ　野坡

雲水ふ打迎とろやもろもこの　秋之坊

とろもう人をとろくるん扇風越ねくし　琴風

ふくん著とをこ絞もようやこ衣　亀翁

牙をなとて捨きそむりふとろもこ　且水

綿をぬく旅麻ハせくとろもこ　久節

そとりるやもの所ある白衣かへ　尚白

裕

嶺雪

鬼貫

園友

独卜

此筋

湖水

素行

青簾

月下

吟松

戈治

希因

葵祭

桃後

支考

葵

撈良

曉臺

葵

雲角

定克

白雲

玉芙

新芙

古庭

卯月

おりひめと木芍薬や四月の雨うり　芭蕉

此ところの肌着身ぶるひ行月うり　尚白

白雲のこゝろや四月のすゑの山　烟外

山城や行月くるりの雛子のこゝろ　錢芝

皐月

たまゝゝみこ日月をうむ五月この角　去来

かゝゝ身を風のせむる五月哉　凡兆

水無月

六月や風ふるふるふるふるとゝ　鬼貫

こゝろ身やこゝろ流るゝ年こゝろ　素堂

ふる雨や月や物ゝゝりの風ゆるき　杉風

みな身や朝起ゝゝる大書院　惟然

六月や蔵ふ明りはゝゝ夏ゝゝ　怒風

夏菰

各ゝ佛ゝゝ菰ゝみや先ゆゝ人ゝ見のゝ　重則

夏書

日ゝ月ゝゝかゝゝる筆の夏書ゝ　蕪村

ゝゝゝゝと夏出のゝゝ社爺ゝ家　几董

灌佛

灌佛や雛ゝ合ゝる歓喜の音　芭蕉

灌仏や素ゝゝゝゝも二年紙　之道

灌佛のゝゝゝ清ゝゝゝゝゝね　尚白

灌仏やゝゝ入相乃大ほゝゝけ　百里

灌佛やはゝし並ゝる井ゝの面根　曲翠

紙子堂　七堂ふ今作人余海や新見堂　麥林
新茶　脱捨こ夏の住居や新見堂　京師
葉擬　踞ってすっかりやすらぎ見堂　分江
風呂　はものてる秋をかくしと新茶この香　考逸
起くのとろ絵衣宿の野茶うの　舎羅
格の戸をうつ門ふせ丹しく筆ふ擬式　嵐竹
大敷はいろ衣かくしと世ふ撰この茶　史邦
扶蓋のをり蹈ありくとえりうを　山店
夏風呂や清水寺とかれとり　宗因
風呂の茶は夏目もうを細ろうの　重房

短夜

みじろ夜やかの五文字ふ明石潟　宗因
ミじろ扶衣二階へとじ上り書ア足　末山
短扶衣吉次ろ冠者に名残ろの　其角
ミじろ夜や木賃もあさとこそ　惟然
みじろよやまこと白粉の香ハのとり　一雫
ミじろ扶ふ麻さめの里も朝麻ふれ　千翟
短夜の声なま長し馬ふ　清門
みじろ扶や百合咲うけく明ふり　林陰
なんの夜やうと衣火ふ篇ふ面る里　旦藻
ミじろ扶ふもるじ手筋や張の爰　青霄
みじろ夜や小見世明ふる町ふる是　芸村

麦

行駒の麦ほなくさむやとりうの素　芭蕉
はうみ合ふ子供のうけや麦そうけ　游力

稲

地あらしやさとろふ星も麥の秋　此筋
家のしら絞の麦や穂ふ生く夕日新　丈草
一株とれや鳥羽田のとろしひき　之道
麦うりや内外もなた高賀の里　重五
あけまうりの穂とくく麦一穂　玄察
しらふ西ふ牛おうとる麦野う素　枳風

小角豆

蕎や日のうけふとろれさうけ垣　鈎雪
小角豆垣妹ふ垣根ふあまふまり　心棘
ふうれとふ私ふに素のなれさうけ我　亀翁

かりを

かりを賣りいうなれ人を酔さうん　芭蕉
二の富ハ廓へもちうく初かりを　沾洲
下部等ふかりを食うる日や佛　嵐雪
麦出まを鰹ふて食ふ山家うな　花紅
うをまいせうなれふや下ひせひ　百里
漕ほけて峯の左りふかりをこう那　紫紅
なりふひても先達鮒やうう川鰹　岩翁
やあ志ほふくタをのか移沢鰹汚　宗因

鮒

鮒挿やなれ魚とりう後のうる　宗因
格上ふ鮒とひふくや毎の法ゆ　秋高
さうまとても石ふなるタや鮒の鮎　負頭

蠅

去来

幟

鬼貫

音楽を蚊遣ふもはるや八瀬大原
賞うんや　松よりかやはるふ昆陽沈

車来

うつつ〜蝿を去うしー入れうり幟の中

曲翠

蚊の声ふのうれさまましてかや紅とく

岩翁

老は身のさふみ下や蚊遣のそは

甚角

花あやめのほうもかをる嵐うれ、

宗因

うりをりやさやや帝考紙幟

文鱗

雲うとよ書の結ふ文て帝のうり

百里

左右さふ横雲うこうれはうりうる

芦本

茶むーろの中ふ立うる帝のうさ

粽

鬼貫

葦原や豊の粽は国津風

西吟

上〜〜ふけふや粽のうとれうり

路通

ゆうやくふ粽とくなり中

蓬西

下さまふ初物さやー柏ちれ

ゆく

山雲のゆひめちうーやちれ竜

玉芙

物さ〜く粽を切うやお乳穴うり

竜尺

鎗りちうはゆふ出うふ粽うあり

甫盛

場うふ畠ふゆうちひくちれ我

菖蒲湯

荷兮

ちやうふ入う湯代りとしうり一盥

来山

ちう紙よやうふの浴ふ蚊う迷る

印地うち

子ふ似くる子のかうとや市地打　仙化
なでしこの嵐を印地かからうる　去志
年ふるき人のとれるしや市地打　溪石

競馬

競馬皆ふ入身のいきみう郎　其角
人の世もかうくしけくらくる　山川
競る拍子なほこらふとこなし　土芝

竹酔日

唐人よ一度こせこそ競馬うる　草士
けのそこくく房りう陣の新うる　朱紬

酔日の人あつあ　其角
雲や竹も酔　野坡
竹ふうるやをよりせる茶碗酒

五月雨

五月雨や蛭蚓のとほると鍋の底　芭蕉
さみだれふかくなりのや濱田の橋　嵐雪
五月雨を説むや紀伊の八荘司　鬼貫
五月雨を堤やきえし天の川　去来
五月雨ふ柳きろまれ行う茶　宗因
牛もなしをる羽のあるうに五月雨　望一
海山をさみだれこそや一トくみ　一鞭
かはねうふ田子のりをそや五月雨　一龍
五月雨や柱日ふ出を市の家　一賢
五月雨や柱日ふ出を市の家　九兆
五月雨や柱日ふ出を市の家　其角
五月雨や柱日ふ出を市の家　松芳

五月雨の夕やみ淀川大井川　挑隣
頭をさけて馬もあるかや五月雨　荊口
けみしれる時あらうるそこうれ　里東

夕立のかしら入こほはしりう角　丈草
宮崎や雲を入梅あうり　養法
双六の相手呼ひこむはしりかな　胡及
胴亀特夜嵩を起をはしり哉　錢生
松風や入梅ふりる日の夏曇り　文丸

鹿ろ袖そこよあるふ降り涼　鬼貫
降りの中ゆうの名や鹿ろ酒　一声

五月雨

五月雨に蔵を雑そこなし人の家　舟泉
たこくし峯ふ下結そく五月雨　椎志
さめも手みみ桃の虫をもたこ人々　拙下

夏の日

夏の日ふ蟬き飴のかや一郎　嵐雪
なるの日や生目てく死そよみ子ふ　文里
夏の日を事とも彫田のあのき　鬼貫

夏の月

蛸壺やそこ形ふ夢をなるの月　芭蕉
明そのく家ふ伏見や夏の月　嵐雪
なるの荻や東ハかりも月を西　宗因
城下や笛きこそあくるの月　露白
たあれこ体酒もさ兎の夏の月　桃隣

夏野

馬はなく〜我を捨ふる夏野かな　芭蕉

拍子とる麦とうとうとる夏野かな　生林

撫子と書や夏野のきりぎすと　元隆

のうつちの荒さく初夏野哉　史邦

なつの山

なつの山やくも井ふまとる雲の新　支考

花をしむけふ夏山の柴くらべ　鬼貫

なつの山を窓覗の花屏風　宗因

雲雀鳴くめと物をとし夏の山　卧高

火串

うの目木の鬼おもそれとり角　李角

照射とる念仏の上を透ひまり　狂風

煙ふ鮎やかうとしをりや法　曙宿

やうち

田植

投られそりうき命や粽の鮎　此筋

目通りのをろの榎や粽さうし　其角

牛ちゝは声もくるしき田植うた　賣車

渺くと尾花ゆる田植うた　曲水

板なりふせりあるりしら係田植哉　文草

青蟹やせんまるもる田植唄　正秀

沖くと笛をのまめる田植哉　示蜂

蔵の篝ふ亀おさへる田うゑ哉　立竜

山吹も巴も出る田うゑ那　許六

菅笠のうそ脛より田植唄　吟

白雨は声ふ尾のある田植哉　鬼貫

風流のたしめや奥の田植唄　芭蕉

早乙女

早乙女よかへこく取こる菜飯うる　嵐雪
老ぬこも早乙女こるふ清田うれ　景道
早乙女のまてせくりのよ川は支　彫棠
明る戸やよ乙女奴ゆる其隣　百里

苗

西う東うまん早苗あも風は音　芭蕉
菩薩こそ苗こそ屋う飾り苗　乙州
燕の下腹さうふさうくこの那　胡布
ゆふうけや粉よきこるよ苗釜　冬市
ふこる牙の植むられこは早苗哉　魚白
頃れう棒哉入けりよ苗うち　琴風
ところ〳〵雲ある谷の早苗れ　紅糸

青田

里の子う燕掠るさうくこの青　支考
親は日ハ寺へ賜こは苗うれ　臥菖
谷風や青田を廻る菴の客　丈草
畔豆もこもあ潤ふ青田うな　楚舟
ぬれ髪哉ふこる門の青田う形　汀鶴
桑帯てあこもさらるる青田哉　桃隣
涼〳〵さや八人代の田はあをみ　荒雀
橋の小高の峰も青田うな　知足

田植哉

ほき格や田草もちねこう水　山店
田のくさよおこられくく富士詣　奚魚

扇子

稽合ふ、十二の骨のあかねの那　守武
まさをなる旅の跡ふむ扇うれ　宗因
さらけなる扇式うけそまうら涼し　丈艸
いつくきて饅頭おりきあふき哉　草士
扇折手ふさんつ〜き化粧ゝ京　尚白
小秋ふけく肌のはもあるる扇うる　糸門

紙帳

あふけく〜いつくう王地ふ京園　宗因
青丹よし白紙うちもなるる蚤　来山
ふるのあふうちいのふさの白八重　其角
かうきより男ふはまれうちハかな　左志
傍常ふうちハさ〜出る物うふ　一蜂

帷子

夜ふ戸寝ハ紙帳ふ効式ふ体青　其角
坂ふふうる目ハかくるふ紙帳ふ　負長
おりふと乗帳ふうるとと送りるる　野徑
かるびらの四五六月のさんみうる　宗鑑
帷子ふあうはりふ日出る那　丈草
ふ幼ゝや佐保と龍田の宮ハ姫　青蛾

紙園舎

祇園舎の山路ふ入るる大徒然　宗因
ふるつとゝや山ふ木はる祇園の舎　梅盛
祇園舎や祢のまふ〜ふ向ふ　如貞
立臼もふ踊ゝやきをんの會　嵐雪

氷室

水の奥氷室こそ川なる柳この那　芭蕉
たゝ法めて千年めれる氷室山　貞室
ありつゝや家ふ冷水ゆめ　溪石

雲の峰

湖や暑を忘れくもの峰　芭蕉
雲の峯なんわ岩嵐ゝくゝ　鬼貫
夕ゝ絶や元ゝ雲の嶺　去来
くもの峯空ふ雲のりやはれぬ　桐雨

雨乞

柴刈ゝくみるゝも雨ふ雲の降　明水
雲の峯腰うけ水ゝ雨ふ　野水
雨乞ふ先立ゝ雨やせきかを　丈草
あまゝ乞や近江となりし川の牧　乙洲

昼蘇

山人の昼蘇を志ゝ蔦かたら　挑妖
かゝひふの洗濯まくを刈る蘇ゝ　昨非
ゝ〜ふ額もさゆる昼蘇ゝ　仰

土用

白雲の天は原常土用ゝ那　望一
寒晒一土用の中ゝ紙ゝ　許六

虫干

捨人や木草にかまて土用干　其角
ありかゝた時代ゝ達や古用ゝし　杉風
ゝ法ゝ香や虫干もせ〜ゝ　ゝく
内張の浅はあゝ土用ほ〜　理性軒
虫ほ〜やせて奥あ清ゝる　粛山

暑

あつき日や海に入こゝろ嶽上州　芭蕉
焼豆腐うちくてあつき夕日哉　宗因
墓の二本ふうくれあつきう那　去来
くれ庭の砂あつくぬくりとう素　荷兮
ちゝんとの藪ふく風もあつうし　野童
なんとろふの暑ひと石の壁とゆく　鬼貫
照付て知らぬもあつし海のうへ　嵐雪
毒もあり子もあり宿のあつき我　氷花
石くろふ蚕二とと臭のゆうはれ　許六
元山はちくらもあつぬあつき我　猿雖
粉ゆなる蛇もあるの暑この家　里東
馬の目はあつくあるる暑うれ　牧童

ちくゝ砂ふ雀足もくあつさこの那
田の草はゆゆへくりそのあつさ哉　遵堅
蝉なりてくく駕もなくなるうさうる　之道
年ちくゝ晩田の稲は暑この彩　採志
並松をくうけて町のあつさか角　溪石
草の戸やあつくくくくくくくくとく　臥高
名菁の内のあつくくや棒はくく　我峯
積あつけて暑しの中ちくくくく　乙州
ゆ日八朝深ふちくぬあつさかる　卓袋
空しくくく水てあるあつくくのうち那　蓬船
村雨のふ城ちくくるあつさうる　行寿
あつき日も擬の木はまの夕日哉　其角
素堂

夕立

夕立の雲もかくらとそなるその空　玄素
ゆふくちのまくやかの廣下結をえん　鬼貫
白雨や障子かけくれ元ゑし　嵐雪
ゆふくちるあとしのく月や松の上　丈艸
夕くちに対ふるとんるる　其角
ゆふ立ゐ干傘ゐる垣穂の那　傘下
ゆふ雨の跡おりゆ堺ら　愚哉
夕立ゐ追ふ立てるれやゐ　隨友
ゆふくちや鉢巻ゐ渡ー宵　仙化
ゆふくちや坂行駕ゐ元ぐれ　山川
ゆ夏ゐさしれるるゆるー赤　沾蓬
夕くちの原ゐ赤ゐ柘木かる　荆口

簟

竹妓人

ゆふくちゐ降く静なる　白羅
白雨のゐけはるれつ山ゐ上　昌房
夕立ゐ跡ゐ廻る山田かな　子祐
ゆふくちやくれ牛の門ち久　李下
夕立や樽の臭のゐきり　久房
江山や沼津の扉風ゐ　宗因
さくなみや近江おりて城　其角
ゆ殘ちんも拠数なり竹婦人　卯七
抱簟や妾かくへきのふる　其角

凉

破風くちぬ日影やうとれ夕涼　芭蕉
涼しきふ榎も伊ゝね木蔭うる　玄旨
そそうして涼しや宿の這入ぐち　荷兮
夕ふ夜氏とまりにくるゝ涼みる　去来
かけ涼し松ふさして落日和　宗因
ちゝぶね人と語同答ゝみかる　鬼貫
犬ふ逸夜氏追ふ狩のそゝみ哉　嵐雪
そゝしさのかゝるうなれや夜半ゝ色　負室
翠黛うして維妻なゝハ涼ゝ舟　秋色
水と羽と合ゝ行輪や夕そゝみ　活徳
小扉風ふ小里そゝし腹の上　丈草
ゐ自ハそのくふ逢ゝ夕そゝみ　風

そゝしさや檣の下ゆゝ多のおと　俊似
涼しゝ氏ハそれてのゝゝ川辺ゝ船　未學
挑燈のとゝゆらゆしそゝみふ自　卜枝
紙涼三粥ハかしまし沖ハゆく　秋風
名涼し檣よりのそゝ茶の白ひ　巴山
我舟と涼むさまなり波しゝ寄り　ちゝと
洋や魂ゝうゝと川そゝみ　柴雫
そゝゝさや帆ゝ船ゝ社ちゝし髮　甚角
琴ひいて老をかませよ夕すゝ炎　智月
牛ゐなれ合炎そ朝森夕そゝそ　支考
そゝしさやうゝゝ行ゝゆきとあり　里東
涼しゝ氏ゝ多川ゝ成ゝりの口ゝ砂　白空

風薫

このあたり二三度りとはすぐるかぜ
ともをれぬ木綿をとしや風の音　野坡
かたひらの谷中ふくほうの涼みの那　山川
ゆりあくも尾花吹うとるすみの月　衛門
故郷を出て宮一度涼む戸口哉　一笑
さくらきや物いふ声そ瓜の小瓶　土芳
けつ浪や風の薫りの相ゆうし　鍋壺
目ふ耳ふあふくね風はかをりかな　芭蕉
帆をかふる朝のけつ波や風薫る　鬼貫
うち水ふのこれさくみや梅乃中　甚角
あらうみやさくの頓穂ふ夏の月　丈草
　　　　　　　　　　　　　　　　卓袋

打水

心太　宗因
仏をや紙園くやしふむよりも　其角
皿鉢ふ駒のけあけやところてん　序令

生瓜　菜瓜

柳さいて片荷を涼しそんな菜　芭蕉
兒のあれ瓜ふあるも生菜うる　嵐雪
白くても瓜き味なしまくい瓜　鬼貫
ふつうけて生い菜もみえね暑哉　去来
茶はこりれをと洗ふをや真菜瓜　正秀

沖鱠

酢徒利氏水うあやすちそ沖鱠　几董
沖鱠ふたとりいてそいをそれよし　曉臺

清水

城あとや古井の清水まん月人　芭蕉
捜さうるあの後清水の片草鞋　嵐雪
まねくひの雫もあらぬあらんかな　宗因
六玉川高野の外の清水なる　去来
をみきりて塩干の沖の清水哉　俊似
帷子ハ涼莫なんてゆくあらん　尚白
逝盃をねつとふ山もとの清水哉　一髪
連あるこまくもて結ふあらんこの那　文鳳
松風よ袋の下よ法清水この東　一道
我跡へ鉄瘡たちよる清水哉　許六
山蔭やあらんつふ音長なる　邪七
海みえてまと立廚る清水久素　嵐水

旅人の足あとよる清水哉　仙化
あんあくの跡ら清水の古寺　其角
此度の縁はトゆく春の角　泊徒
落合く音形くなり清水かな　蕪村

皿井

ちゝし井や底うら寒い人の声　桐雨
きゝしあや浮世ハかるる水ころ　嵐雪
さらゝ井や男あんまる文長亀　洛々

汗拭

尋常の和巾さんきゝ汗拭ひ　嵐雪
扇折いうな持ふれあせぬうひ　千那
生の松ひろに忘ふへあせ拭ひ　其角

夏痩

夏やせぬ能因あるも小食なり
なる痩を恐るる人とこそ見えや
ゑ川やせやうゑ唐土の半妃ゐの

其角　風子　友静

川狩

川狩やまのうらゝ海よ手柄とる
川うを中ゝしゝ木義ゐ支流之

我峯　愚心

秋近

秋近し故とゝ会
秋かへ居とゝ人は秋ちゝし

此筋　京邨

不二詣

ゝゝ雪ゐ恵きゝ若元ゝ富士詣
角帽子雪ゐ凋むやゝゝ詣
武士ゐ川越ゝゝ富士まゝうて

其角　素堂　李梁

法被

人並の縞をも越ゝり御紋川
夏ゝゝゝゝ目の行方や波路島
破ゐ扇一度ゐ流を御紋ゝ南
吹降の合羽よそゝゝこゝゝ川
ゝゝゝゝ豆腐とりまく出紋川

宗因　嵐雪　未学　其角　琴風

冊

卯の花ゐ及摺宝しゝ川俤山
うゐゝゝ形よゝゝと西紀麻起戎
卯のゝゝゝゐ陳あゝきやゝれ嵐
卯ゐ花や西のあゝりゐ皆の跡
うのゝゝゝゝのゝゝゝ曇ゝれ
卯ゐ毎の塔ゐゐ紋なゝゝ垂の垣
うのゝゝゝ自のゝゝゝ窓明ゝ

去来　枳風　之道　楚舟　支考　土芳　野坡

法衣

若葉

むらふ雨ふりそそぐ梅雨の若葉哉　素堂
世そ〳〵寂しき若葉の雲はめさめけり　其角
ひとしきれ梢もうるほしそよかの那　楚舟
よ〳〵あ〳〵とふくて若葉ふかるる　定良
おりひこあてみくき岳の若葉哉　宗因
若葉ふく風やくるとは刻よし　嵐雪
非情あも毛孫きの桃杷の若葉化　鬼貫
まこころと我い身延の奥をこえん　敬雨
きり株の若葉とこれ横この若　不交
若葉あらしそくふ祈の冬木う那　藤蕉
夕立ふるる若葉のうへの若葉うれ　荊口

若楓

傳西の書記とかやとうかがへ
物食ふ若楓しら鳥やまるる　鳥用
馬ふ家かうは所くやわらかへて　嵐竹
さらりけなる剣素こうは　卓袋
若楓　兎等

若櫻

若櫻ちらふに公卿うしや歌ゐあ　鬼貫
ちるとうり散のこりてもの横ろ形　沾荷
えもうえうや遠れ斉家のうそ　螺羽

若橘

さうふは実冷ふて暖らへ若の山　一鉄
山橘實成りてくやよ多も形し　馭棠

茂

嵐山薮の茂りや風おとち　芭蕉
川苔の流るるさろ白み蔵りかな　嵐雪
神くと春日ふけつて法さらかぬ　鬼貫
ちけつるゆく草陣の姥や蜘の情　宗因
岩ゑあか一ッの山は去きりこの那　去来
茅のあと今朝ハ鶴不との茂て哉　子珊

夏木立

よ川さのむ椎の木もあり夏木立　芭蕉
たそたの森社ハいつらなる木立　昌雅
鷺の羽は淺黄ふ咲くや夏木立　希因
夏木立ちとちつ木はたふ猿の声　安枝
蜘の巣ハあへきりのかろ夏木立　鬼貫

下闇

須磨寺ふ鶏ね留まく木下闇　芭蕉
雪雨ふ木の下闇は帝帳この京　嵐雪
下闇や牛は御前を腹へらし　百里

青嵐

うき雲や左右ふ別まて青嵐　史邦
麻衣巾吹落しまりまあらし　巴流
色としもあうりうろ初あを嵐　嵐雪
雨ふれて松の白ひや青あらし　支流
梢ふ破風の光りやなを嵐　百里

常盤木（ときわぎ）

松風の落葉ふ水の音よとし、　芭蕉
夏ふとふ蔦ふ常盤ふ　負室

桐の花

かみなりのなりふるとき雷のしし桐の花
桐の花青そらに入せてたのしねり　史邦
墀こしふ大工はたらひやきりの花　猿雖
此うち降うう南や雨りはを船　因友
歳る木の中ふかうもし桐の花　子巣
　　しらし

花柚

柚の花よ昔ちのそん料理の写　芭蕉
少は苔や庭へちりるつゆとあり　彫棠
行・あもの国へ苔柚をまるひとと　言水
柚の花よ仇名あと酔ひろ　沾徳

夏柳

蓋とれい蚊の花井戸や夏柳　一嵐
祝ふあて風ふ蔵おりまる柳　原休

青梅

青梅や花のれう宿ふ蔵ふ　岩泉
まるものや乳母ふる妻の面かくし　幽笑
あと梅やそをとりのれ姿　入松

撫

撫佩てうきとめうしやちは者　嵐雪
干物のもしろ雨ふるやそる撫　白雪
うき雲やあちの花よ雲の声　因友
温飽打とりわくりあちの栽　素覧
水まさのくもう撫のそなの清　平吉

栗

世のくはうけねそ彩や彩の栗　芭蕉
湖はなきはよちるや栗はそな　風弾

合歡

象潟や雨に西施がねむの花　芭蕉
合歡の木ねぶるとなく清見潟　仙花

覆盆子

枝枝や傾くしをれいちご　重則
手の跡を忘れぬ甲斐のいちご　陳由
皇紙の覆盆子洗ふ滝哉　朱紬
水くれは澄とりまくいちご角　杜池
井の底は蛇を忘るへ蔓いちご　山川

百日紅

古寺や仏をかめると梭棡の花　三園
掃くとなく日和くもるけさの秋　度江

柿の花

此中の古木のいつれかきのくの邪
梢は花蟻のちりとそうはかな　此筋可廻

百日紅

さるすべりも花ふハあるね百日紅　其角
ちりぬるや百日紅の散る日まで　支考

杜若ゑれは発白はおかしあり
ゑ稼はなく蛇の皮　芭蕉
世を此世ゑれふをしくよ杜若　丈草
獨寝る寒はゑふせんかちりまき　嵐雪
植ゑるなる所さきの燕子花　周也
吾を白は下ゑおく形りうちゑ　桃雨
成之

牡丹

寒さうふぬ蕊や牡丹のそれの蕊　芭蕉
土嘗くそふかむ牡丹なる　嵐雪
我々身の細うるりこやはこん畑　鬼貫
咲ふりふるんるまれ紅牡丹　一井
蜻蛉獨ぬたんまりうかくふるうれ　許六
一下先ハはこん嶺ゑ蛍まうる素　路健
牡丹こんふうつもりとよれ唐茶哉　桃隣
頭刺る袖とそくふきあそくるる　猿雖
藤ん起川牡丹の波ゑみひくくを　濱波
誰宿そ穴明き岩ゑ紅ゑうん　毛紈

芍藥

芍藥も紅とりの紅と者れり　紫紅
す隠もそしむ芍藥の花えう非　有也
麦の穂ゑ芍藥埋む里のせと　自笑

葵

刺さけの葵ゑそそむ鳥帽子ゑれ　魯丁
野草ゑ夫のそくる葵この有　岩泉
ゑも痩てゑふひつける葵うに　荷兮
蛍ゑ一酒は夕紅ゑゑのゑひ　仙化

苔の花

蛭は卵ゑまくゑ苔ふ苔のそる　野坡
ふうせくゑ蹄ゑ咲ゑりゑけの花　希因

苓子

白苓子や附西の茄北咲けるく人　芭蕉
給出せ老ふ人けしのひとそなる　素山
松茸の一下濱留守そ苓子の花　去来
苓子散て直ふ実をそる夕う那　李桃
ちるらむ山見そ拾ひねけしの花　吉次
人いなと散るとそあね苓子は花　澤水
咲るちるる山生ほきけしの畠栽　傘下
まちくや馬湖ゆとる豆の苓子　丈草
大粒る西ふとくく人けしのそ那　東巡
いくほとの世ふきれいしまるの茎　支考
京出てく泊りまとゆ苓子とる那　里東
青くまき白ひもあひけしの茄　嵐蘭

竹子

あきみ

竹の子や雪深ふまて嵯峨の坊　嵐雪
筆やかり森の床はとふよりも　鬼貫
ふ毛身の牛れ子うれし竹生崎　去来
子ふはれてゆるまとや去年の竹　丈草
垣根こ牛の子祝ひ魔この那　全峯
竹の子や境目もあらと二葉生　智月
うけのふはちくくを流ふたらふ人き　凡兆
筍のちうらはきれ赤とりか南　猿雖
下りまる牛の子盗むまよりれ　玄梅

前のそう船繋まくびなり旅とるも　嵐雪
なきけるまき名紙いもせる前　風聯

蕗

いんつきて蕗の葉ふかりるおふくそも　里東
草如やふきの葉ふりの蕗ゝいちこ　汝村
子ふ毒うとしいへ迷ふき葉り　乙州

茄子

苣いまこ青紫ふるうゝやるとひ汁　芭蕉
赤味噌ふ入れるまりる初茄子　北枝
一本の茄子もあまほをあひるれ　杏西
神崎ふ茄子もひとりちりけるゝ　園女

藜

瓦とりせん藜の杖よなる日まく　芭蕉
元政の軒かうゝほあさう。う有　西濯

紅の葉も海のかさりも朝熊ゝ　去来
きゝおうね麦けゝりやるふの花　山店

紅の花

蜀なゝゝ一枝ちゝんなりのきく　甚角
夏菓やゝとゝの葉ゝ先ゝ咲く　桃候

夏菓

ゝとりとむ法師のゝゝゝ麦の菓　をんる
なんきゝやれも西ゝあゝ三ゝ　旭芳

撫子

ゝてゝゝゝ子や蔚法ゝゝとゝふゝらん　越人
撫子ふ幽ゝとゝ一ゝゝゝ川ゝゝり　嵐蘭
なゝゝゝ子のゝゝゝ元前のゝきゝ栽　猿雖

玉合

花ぞなれとかゝ浮世をくるまゆり　宗因
姫ゆりやうくとうりわたり協の仏堂　素行
飴うりの箱ふさいくり玉合のそゝ　嵐雪
さみうれふ松もゆたしゆりはなる　彼笠
草むらや百合ゝ中く花の顔　其角

橋

後河路やそゝ橋も茶の白し　芭蕉
夏そ海る霧てらちそゝの起てりそ　鬼貫
たちそゝやゆるしの拙ことゝえそゝ　木因
橋や志ゝふもちゝ志ゝ多の叢　桃隊
あけりのを橋くちゝ旅とゝ　我峯

畳

ひるかゝる米橋流むあつ畳ゝり　芭蕉
畳敷ゝひと書きよゝ塗の跡　野坡
初る島や夏山伏の峯法ゝし　交考
畳ゝ月やこもに刈ゝ麦ゝ　桃隊
枯柴ゝ畳ゝ月暑ゝ足のまゝ　斜嶺
ひるかゝ月やロハ暑れとも花ゝり　泊圃
畳ゝゝ風のゝゝゝや書ゝ月あと　嵐蘭

藻の花

藻のゝゝとかゝまする蛍の登ゝ　胡及
藻ゝる湖水めゝきるや夜の山　秋風
潮引ゝく藻の巻ゝ月暑ゝ那　児竹
藻ゝゝまのゝゝれゝゝや泡の上　桃隊

櫻

笠ぬきて中やくらくらと麻　青蚊
行ぬけの家あるじや櫻あき　一笑
三日月はうろうろ出て居るはらら麻　嵐竹
いうれしてはむかるるくん櫻ぬき　杜格
誰ふけば鼠のるるくんさらら麻　普人

紫陽花

紫陽花やかうろうろ時の落涙哉　芭蕉
あちさゐを五器よりうるや世枕　嵐雪
紫陽花やうの目くくのひとろ　梅扇
なちきあふくて安きこ扉うち　伯之
背くくろよ名もなちきるの色は寄　為松
紫陽花や西はちはうろうろ空の文　希因

萱草

ひもてきて人の言ふ武くうろうれ世　未山
住ハ誰と家よ花さくや古屋　燈外

菊

やくきくと帰やく五天のあやあくさ　芭蕉
あふとりう時もあやえふきふけり　鬼貫
ちくうり尾の長菊くふなのやあうな　嵐雪
第の附菊根ちくれくら菖蒲くさ　如泉
あやあさと斬さくくれの時の花て栽　荷兮
五日ちてあとろうるなのやえん花　桃隣
馬ふあるる待きくはしそねあやあ　仙化
尺なれのあやあハ蛾ふ直りさくり　子珊

夕顔

夕うはや秋いろ〳〵の瓢この有　芭蕉
ゆふうはやるさらまの使ひ虚目哉　宗因
夕顔や名をおとしこしる花の形　去来
ゆふうはの志ろむく人の志ろ心ぬく　野水
夕白や香かくやとのまくらあも　大町
山路きて夕うはゝてる世中の郎　市柳
夕うはや一枝のこゝ屋　豆腐　許六
ゆふうはや一白のこゝとゝ志ろのかと　甚角
夕うはの這せ所ふちまりとり　堤亭
ゆふかほは花ゑんの気や油煙　詩六
夕顔や あさりとゝれい炭とゝら　杉風

蓴

蓴の実もいきまきまし〳〵ちうあや　嵐雪
鯉とんで蓴のくきのうねるうねふまり　つる女
うきくさや嘉ゑうと門おく　柴栗
蓴咲く拾うきくさの落ふうく　知足
泥鳅や ふらきくはのきくふあ　蝶羽

河骨

河骨や終ふひとゝ花はこうと　素堂
川ゑ蓴や橋ゑ樹ゑ夜半　嵐雪
かはほねの二本きくや西の中　蕪村

蓴菜

蓴菜の名は人めくもあられとり　
蓴さんやゝ志るうし能ゑる水ニこゝ

蓮

さゝわくゝと蓮うとうといけの亀　甘丞
浦舟の頭ゑ〜旬ふとちとう春　史邦
森てうと人蓮ふ秀ふ朝ゆふけ　良品
むく起や初〜〜くる蓮数ちと　沾德
蓮の花ちるや八畳のこゝれに　晨風
客あるし芋ふ蓮の地追わん　自悅
ゝとの香や田い往ゑる水の跡　正秀
蓮ゝん日ふ月代をゝ陸ゝとも　古梵
鮎の手て蓮ゝ沈ゝふことわる蓮
吹数りてゝのうゝ人ゝちとかゝふ
笠をまうてみなゝく蓮ふ巻ふ鬼

蓮紫ふ　素堂
沢深　白雪
菊の花　嵐雪
玉蕊刈　鬼貫
　　朝叟
　　此筋
　　鈍可
　　邑姿
　　且藁

蓮紫ふ此蓮ゝ風情ゝゝゝん
ゝとのちあや初のとうきゝゝれ
沢深の蓮ゝとうきゝゝるあ川さゝ初
中を蓮ふあもゝゝる細く咲ふ巻り
おもゝあゝや千住の九輪ゝ知こし
ねめゝゝ形ふ初ゝ〜〜ゝゝの濁りゝ初
菊ゝ花や泥ふゝとゝゝ霄の西
鴨の子や袋ふ入ゝ〜まとふ刈
ゝとの花おくけしきゝ沈ゝ刈まとも

若井

若井の背しらくもの雲のえん　宗因
昼撞や若竹そよ〳〵山はさく　丈草
一下えくつはとけるまき井の水　仙花
若竹や雨追ふ風はけそとゐうさ　路徑
さゝ井や水の中てのそよぐき　和泉
いろ竹の香ゐあさ〳〵と鱸ゑ　百里
若井のうふ蛙みゑる雀ゑ郡　亀洞
さゝくさけゐ涼しきき声や七ッ嶽　車来

林檎

もゐゑとゐもアんてゑ畑ておもゑし　甚角
ゆゑしさも紅ゐあきき林檎ゑ郡　百里